

325  
397

0<sup>m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18</sup>  
70<sup>m</sup> 1 2 3 4 5

始



梅原真隆著

正信念佛偈講讚



大日本真宗宣傳協會發行

## 序

この小編は『正信念佛偈』をいたゞいて、その感想を『眞宗の世界』に連載してまゐりましたものを、まとめたのであります。その折々に思ひ浮ぶまゝをかきつけましたので、纏めてみるほど整ふたものではありません。潜かに聖なる偈文をけがすことがないかを怖れます。なほ、意にみたないところがたくさんあります。然し筆を加へかけたら、全然書きあらためなくてはならない氣持もいたします。そこで、寧ろ、添削を施さないで、そのまゝにしておきました。その内に、小閑

— 2 —  
でも得ましたら、整ふた讃嘆を公にしたいとおもひます。かゝる纏らない講讃を『眞宗の世界』に連載せられた野依君と、これを愛讀して下された道友に對して、こゝにお禮を申し上げます。

昭和四年の初夏

京都東山葛南小隱にて

梅原眞隆

## 正信念佛偈講讃 目次

- (第一) 浄土眞宗の根本要義……………(一)  
浄土眞宗の教義……………立教開宗の宣示……………行信兩卷の蝶番ひ
- (第二) 他力眞宗の正意……………(10)  
眞實行と眞實信……………聖人の生命の律調……………唯信獨達の已證……………正信偈の組織
- (第三) 南無歸命のこゝろ……………(三)  
親鸞聖人の信念……………南無と歸命は同意語……………解、行、信の三見地……………歸命は禮拜である……………歸命は隨順である……………歸命は勅命である
- (第四) 眞實の如來を仰ぎて……………(六)  
親鸞聖人の歸敬……………佛格の眞實と方便……………壽命無量と光明無量……………草庵生活の表象……………眞實の體驗者
- (第五) 法藏因位の本誓……………(四八)

真宗の根本聖典……………本願攝受の様式……………法藏菩薩とは何ぞや……………四十八願の内容……………五劫思惟の文に感泣……………

(第六) 無碍難思の光耀……………救済の靈能を讃嘆……………十二光の解説……………詮要は無碍光佛……………徳號本尊との關係……………(六)

(第七) 名號念持の信樂……………本願と光明と名號……………眞實の不行……………傳統に即せる已證……………對象たる法體の名號……………眞宗の大名……………「信」中心の本願觀……………親鸞聖人の本願釋……………眞實の證果……………平生業成の徹底……………往生即成佛の徹底……………(七)

(第八) 大聖釋尊の本懷……………「慶し所」聞、嘆し所「獲」……………一佛即一切佛……………二尊の對立……………二尊の統攝……………(八)

(第九) 仰いで信ずるのみ……………大聖一代の教法……………「應信」は「如實の法」……………惡人正機の奥旨……………(九)

(第十) 一念喜愛の心……………(一〇)

信は往生の道である……………一念喜愛の心……………救はれるものゝ悦び……………煩惱を斷ぜずして……………不斷は他力を示顯……………煩惱と涅槃との對立……………(一一)

(第十一) 平等一味の信界……………宗教は純一の境地……………法然上人も耳四郎も……………吉水の御草庵にて……………平等一味の信伽……………(一二)

(第十二) 慈光に護られて……………名號は慈父である……………攝取の心光とは何ぞや……………「常照護」の一句……………「常照護」と「常覆天」……………(一三)

(第十三) 横超の直道……………相對是認の世界……………卓拔せる教相判釋……………横と豎、超と出……………(一四)

(第十四) 稱讚せらるゝ生活……………馬に踏まれて朽ちる雜草……………第三の聖眼として……………西方の淨土に一蓮の花……………月輪が圓鏡のやうに光る……………(一五)

(第十五) 難信の省察……………(一六)

救はるゝものゝ生活……………二障は二種深信に反立……………愚禿の名告は新生活へ

(第十六) 賢聖にみちびかれて……………(一五二)

われ等は何處に行くべきか……………謙虚なる佛教への随順者……………相承に三つの様式がある

(第十七) 南天の聖者……………(一五七)

先聖を慕ふて……………大聖釋尊と南天の聖者……………楞伽經の懸記……………生命の道を行く人……………道に對する龍樹の鴻判……………龍樹は大道の啓拓者……………一切群生の救はるゝ道……………如來の憶念したまふ反映……………憶念の人は見佛の人……………信の一念に佛地を嗣ぐ……………念佛は佛教の生命である……………宗教の救済とはこの聖化……………魔呪的な念佛……………觀念と滅罪との念佛……………念佛は絶対救済の表示……………報恩は感恩である……………教行信證の眼睛……………「かたじけなきよ」の一語

(第十八) 北天の聖者……………(一九)

印度の二大聖者……………淨土論は眞實を顯明……………大聖釋尊の生命を嗣ぐ……………大經は眞實の教である……………廻向といふ努力を轉回……………人生への透徹と活現……………一心とは天親菩薩の自誓の詞……………群生を度せんが爲に一心を彰す……………契法のそのまゝ契機である……………一心は信心である……………功德の大寶海とは名號である……………大會衆とは淨土の聖衆である……………墮獄の惡魔がそのまゝ佛子……………蓮華藏世界とは淨土である……………往生はそのまゝ成佛である

……………往相の空竟するところ還相

(第十九) 雁門の聖者……………(二〇〇)

二大教系の綜合……………曇鸞傳讚の原型……………建立淨土の洞觀……………眞實の救ひは全的である……………大道の意味を顯示……………三願を以て的證……………唯信主義はこゝに確立……………聖化と自爾の實現……………めぐまれた宗教生活の典型……………卑濕淤泥に蓮華を生ず

(第二十) 石壁の禪師……………(二二〇)

教法についての現實的批判……………聖道の證りがたきこと……………淨土門こそ一筋の白道……………淨土に救はれてゆく二筋の道……………相對統一と絶對統一……………慇懃の教誨を感佩して……………淳心と一心と相續心……………客觀の法と機の主觀……………常住の大道……………絶對の救済……………遇ふといふことの意味……………救ひの究竟處

(第二十一) 終南の大師……………(二二二)

古今階定と偏依善導……………善導獨明佛正意……………分化の二大鴻判……………凡夫さながらの救ひ……………純正淨土教の白道……………凡人道の啓拓……………名號の慈父と光明の悲母……………凡地に於ける唯一の聖化……………金剛不壞の信心……………金剛のやうに光る確信……………權威に外ならない……………法悦と充足……………韋提希と等しく救はれる……………涙ながら心からにつこり微笑

(第二十二) 横河の先達……………(二四九)

日本浄土教の啓拓者……………他力念佛の高揚と權威……………絶對救済の道味……………廻向と攝取  
……………名號は乳の如く光明は腕の如く

(第二十三) 吉水の太祖……………(二五六)

眞宗の興立……………恵信尼の文書……………浄土眞宗……………轉迷開悟は信心を要とす……………兩  
聖の道は一である……………「唯可信」の權威

—(目次終り)—

# 正 信 念 佛 偈 講 讚

梅 原 眞 隆

(第二) 淨土眞宗の根本要義

淨土眞宗の教義

をもつとも純全にうち出し、且つそれをもつとも整ふた組織をもつて表詮せられたのは、いふまでもなく親鸞聖人の代表的撰述たる『教行信證』であります。この『教行信證』のわが宗に於ける地位に關しては、本願寺の覺如上人が『教行信證大意』の始終において鮮明に宣示せられてあります。すなはちその序言のうちに「當流聖人の一義には教行信證といへる一段の名目をたて、一宗の規模としてこの宗をばひらかれたるところなり、このゆへに親鸞聖人一部六卷の書をつくりて教行信證文類と號して、くはしくこの一流の教相をあらはしたまへり」としめし、また結語のうちには「この教行信證眞佛土化身士の教相は聖人の己證、當流の肝要なり」と宣べさせられました。これは實に適切な讃仰であつて、すべての人々のう



なづくところでありませう。まことにこの『教行信證』は「聖人の己證」すなはち親鸞聖人の独自の體驗を表白せられたものであります。「當流の肝要」すなはち淨土眞宗の卓越せる本質を開闡せられたものであります。もとより親鸞聖人には開宗者としての自覺はなかつた。愚禿すゝむるところさらに私なき謙虚な修道の生活を徹底せられたのであります。従つて『教行信證』とても決して一宗開闢のための宣説ではなかつたのです。この總序のうちに「こゝに愚禿釋親鸞、よろこばしきかな、西蕃月支の聖典、東夏日域の師釋に、あひがたくしていまあふことをえたり、きゝがたくしてすでにきくことをえたり、眞宗の教行證を敬信して、特に如來の恩徳のふかきことをしんぬ、こゝをもて聞くところを慶び獲るところを嘆するなり」とまうされましたやうに一部六卷の『教行信證』はまさに敬信の慶嘆をあらはされたものであります。そこには秋毫も開宗者としての意圖はあらはしてゐられないのです。しかも開宗者としての意圖を有したまはなかつたところに、眞實に開宗の偉業は成就せられたのであります。かくて覺如上人が「教行信證といへる一段の名目」を創建して之れを「一

宗の規程としてこの宗をひらかれたるところなり」とのたまひ、「教行信證」を敬重して

### 立教開宗の宣示

であると仰せられたのは、まことに適切な讃仰であるともうさねばなりません。この點については、現時の眞宗の各派が、この『教行信證』を御撰述あらせられた元仁元年をもつて、立教開宗を標しづけて、開宗七百年を記念し慶讃せるは遺弟として、門葉としてはふさはしいところみであつたとまうさねばなりません。親鸞聖人に開宗の意圖がなかつたからといふ理由で立教開宗の慶讃は無意味であるといふ論者は、實は不徹底であります。開宗の意圖を有したまはざりし親鸞聖人の生活のうへに却つて本願一實の大道が素純に開闡されてきたことをおもへばいよく趣致ふかく感ぜられるわけであります。これを要するに『教行信證』は覺如上人の仰せられたやうに立教開宗の權威ある聖教として敬重しなくてはなりません。古來この『教行信證』を『御本典』と敬稱して一宗の根本聖典と頂戴することは、適切なことであ

ります。而して、親鸞聖人を慕ふもの、淨土眞宗を窺はんとするものはどうしても、この『教行信證』に直参しなくてはなりません。親鸞聖人の撰述あらせられた漢和の聖教はかなりのくさんのこされてあります。何れの断片をうかゞふも聖人の生命にふれることはできませんけれども、この『教行信證』を基調として窺ふとき、始めて純全な生命のすべてを内観することができるのであります。近時、親鸞聖人を讃仰し思慕するものが多くなるにつれて、いろ／＼な見方もあらはれるやうである、またいろ／＼な見方のあらはれることは結構でありませぬ。ちろ／＼な獨断のうちのみ固定しておく必要はすこしもありません。もつと自由に、もつと端的に、もつともつと誠實に親鸞聖人の生命に實参すべきであります。けれども、これを試みるにあつてはどんな人でも、『教行信證』を閑却して親鸞聖人をうかゞふことは不可能であり、非自然であります。この語、因みに江湖の親鸞研究者の参考に供しておきたいとおもふ。さてこの『教行信證』を讃嘆してゆくことは一朝一夕のわざではないから、私はまづ、この『教行信證』のうちで、その眼睛ともいふべき『正信念佛偈』について、どなたにもわ

かるやうに平明な講讀をこゝろみることにいたしました。若し同朋の修道のうへに何等かの助縁ともならば幸甚であります。いま私は「正信念佛偈」を指して、「御本典の眼睛」であるとうまうしましたが、この意味をいさゝか申のべておかねばなりません。世間では「正信念佛偈」といふものはもとから別冊として撰述せられたものゝやうに思ふてゐる人々も少くないやうであるが、そうではないので、これはさきほどの『教行信證』のうちにあるのであります。つまり『教行信證』の一部であります、淨土眞宗に於ける『教行信證』の地位は上に述べたとほりであるから、その『教行信證』における「正信念佛偈」の地位をあきらかに示せば、おのづから「正信念佛偈」の權威もあきらかになり、私が「御本典の眼睛」であるとうまうしたことも明白になります。まづ『教行信證』の組織を窺ふに一部六卷の聖教である。いはゆる「六卷」とは『教卷』、『行卷』、『信卷』、『證卷』、『眞佛土卷』、『化身土卷』である。そして、前五卷は「眞實」を顯示し、後一卷は「方便」を簡別せられたものであるから、本質を眞實に結歸すれば前五卷に攝めることができます。更に第五の『眞佛土卷』は證の境界である佛身と佛

土の内容を隠顯せられたものであるから第四の『證卷』にまきあげることができませう。かくて教行信證の四法に歸結します。さて、教行信證の四法はこれを「教」と「義」すなはち「能證」と「所證」とにわかつときは、「教卷」は能證であり、「行卷」「信卷」「證卷」は所證に屬する、そこで若し、能證を所證に歸すれば行信證の三法がのこるわけであり、更らに行信證の三法について分別すれば行信の二法は因であり證の一法は果である。因が成就すれば果がおのづからあらはれてくるわけであるから、因の「行」と「信」こそまさに眞宗教義の本質であり、現實の人生に於ける宗教生活の當體であります。かくて、一部六卷の『教行信證』はこれを證じつめると『行卷』と『信卷』とに結歸するのであります。さて、この「行」と「信」とについて、覺如上人は『教行信證大意』のうちに、簡潔に、その要旨をしめされてありますから、次に抄録しておきませう。

第二に、眞實の行といふは、さきの教にあかすところの淨土の行なり、これすなはち南無阿彌陀佛なり、第十七の諸佛香燄の願にあらはれたり、名號はもろもろの善法を攝し、も

ろもろの徳本を具せり、衆行の根本、萬善の總體なり、これを行すれば西方の往生をえ、これを信すれば無上の極證をうるものなり。

第三に、眞實の信といふは、かみにあぐるところの南無阿彌陀佛の妙行を、眞實報土の眞因なりと信する眞實の心なり、第十八の至心信樂の願のこゝろなり、これを選択廻向の直心ともいひ、利他深廣の信樂ともなづけ、光明攝護の一心とも釋し、證大涅槃の眞因とも判ぜられたり、これすなはち、まめやかに眞實の報土にいたることは、一心によるとしるべし。

これによつて窺ふてもわかるとほり「眞實の行」とは南無阿彌陀佛であり、「眞實の信」とは至心信樂欲生である。すなはち大行はわれらを救ひたまふ「法」であり、大信はわれらの救はるゝ「機」であります。これを如來から云へば名號ひとつによつてすべてを救ひたまふのであり、これをわれらの立場から云へば信心ひとつによつて往生するのであります。かくて絶対に他力の救済が成就し、唯信獨達の宗致が徹底したのであります。親鸞聖人が「教行信證

といへる一段の「行」と「信」との眞實の交渉を明かにせられたのであります。行」と「信」とはまことに一宗の根本要義をしめす關節であります。そして、

### 行信兩卷の蝶番ひ

をなすところに、この「正信念佛偈」が安置せられてあります。してみれば、「正信念佛偈」が「教行信證」の眼睛であることが首肯せられませう。「教行信證」の眼睛たる「正信念佛偈」はまさに淨土眞宗の根本教義を詮表する偈であります。先哲は「教行信證」を拜讀して「一字一涙の聖典である」とまうされました。その一字一涙の「教行信證」の眼睛たる「正信念佛偈」はまさに親鸞聖人の生命そのもの、律調を傳ふるものでありませう。このたふとい偈が一宗の信者のすべてによつて朝な夕な拜誦せらるゝといふことは、まことにありがたいことであります。どんな片田舎にゆきましても、すべての御佛壇にこの「正信念佛偈」の安置されてゐないところはありますまい。よろこびの朝も悲しみの夕も、眞宗の信者が佛前にひざまづくとき

はこの「正信念佛偈」を念誦して如来を仰いで居ります。かくのごとく一宗の根本聖典の肝腑たる「正信念佛偈」が民衆に親しみを有することになつたのは蓮如上人の時代からであります。すなはち文明五年に蓮如上人が吉崎にゐられたとき、この「正信念佛偈」と「三帖和讃」とを刊版あらせられて、朝夕の勤行に拜誦するやうに一般の宗徒を、しつてくたされたからであります。朝な夕な拜誦するこのなつかしい偈文にどんなありがたい法味がこもつてゐるか、どんなたうとい生命がつたへられてあるかを領解しておくことは、親鸞聖人の御あとを慕ふわれらにとつて大切なこゝろがけのひとつであらうとおもふのであります。

### ( 第三 ) 他力眞宗の正意

#### 眞實行と眞實信

とは他力本願の宗教における一雙の眼晴である。そして、この『正信念佛偈』こそ眞實の行を顯はされた『行卷』と、眞實の信をあらはされた『信卷』との蝶番ひであることは既にのべたとほりであります。このおもむきを親鸞聖人は『正信念佛偈』のまへにみづからはつきりと宣明あらせられました。まづその文を拜見いたしませう。

凡そ誓願について眞實の行信あり、亦た方便の行信あり、その眞實の行の願は諸佛稱名の願なりその眞實の信の願は至心信樂の願なり、これすなはち選擇本願の行信なり、その機はすなはち一切善惡大小凡愚なり、往生はすなはち難思議往生なり、佛土はすなはち報佛報土なり、これすなはち、誓願不可思議一實眞如海なり、大無量壽經の宗致、他力眞宗

の正意なり。

これ偈前の文の前分であります。これすなはち、阿彌陀如來の誓願の内容は眞實の行と眞實の信に結歸するおもむきを示せられたのである。而して、この眞實の行信によつてあらゆる衆生が救はれることを明かにし、この眞實の行信の業因によつて開展する證果はすなはち眞實の難思議往生であり、眞實の報佛報土に參徹して、救済の究竟せらるゝ旨趣を宣べられたのである。即ち一宗教義の縮圖である。教義の縮圖などいへばいかにも冷たくきこゆるかも知れないが、親鸞聖人の救はれた體驗の披瀝である。これはみな凡小のはからひを超越した誓願の顯現である、唯一眞實の眞如の風光である。釋尊出世の本懐たる大無量壽經の宗致である、他力眞宗の正意であると讃嘆せられました。してみれば、この他力眞宗の正意たる行信を讃仰すべく、自ら救はれたる内感の風光に感激して『正信念佛偈』は選述せられたのであります。これを要するに、この偈前の文の前分によつて眞宗教義の施設の上における『正信念佛偈』の地位を窺ふことができます。更らに、この『正信念佛偈』を撰述あらせられた

親鸞聖人のお心もちすなはち撰述の意志は、續いて偈前の文の後分に叙べられてありますから、次に引抄いたします。

こゝをもつて知恩報徳のために、宗師の釋を披きたるに、言く、「それ菩薩の佛に歸す、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜己れにあらす、出沒かならず山あるがごとし、恩を知つて徳を報す、理よろしく先づ啓すべく、また所願輕からず、若し如來、威神を加へたまはずばまさに何を以てか達せんとする、神力を乞加す、このゆへに仰いで告ぐ已上しかれば、大聖の眞言に歸し、大祖の解釋を闡して佛恩の深遠なるを信知して、正信念佛偈を作つて曰く

これだけの前置のお詞があつて、六十行一百二十句の正信念佛の一偈が撰述せられてあるのであります。かくて、佛の願力よりたまはる行信によつて救はれた親鸞聖人にとつては、たゞ佛の恩徳を仰ぐことが純全な内感でありました。救済の恩徳の深遠なることを信知してよろこび生きたられた

### 聖人の生命の律調

がこの『正信念佛偈』となつてなされ出でたのであります。「知恩報徳」の一句はまさに選述の動機であり、信仰生活の基調であります。「大聖(釋尊)のみをしへ大祖(三國七祖)のおさとしを拜見しつゝ、そこにこの私を救ひたまふ佛恩の深くして遠いことを信知して正信念佛偈をつゞります」と仰せられた表白を視つめると至純な聖人のおこゝろもちがはつきり思ひ浮べられます。かゝる敬虔な至純な感謝のあふれた聖人の衷情に天親菩薩が『淨土論』のはじめに「世尊よ」とよびかけられたおこゝろもち、それをくはしく披露せられた曇鸞大師の「論註」の文、即ち歸敬の心理が、歴然として再現してきたことも、趣ふかいことのやうに感じられます。「親鸞」といふ御自名が天親菩薩と曇鸞大師への景仰を暗示されたものであると覺如上人は『報恩講式』にまうされてあるが、これをこゝに想ひ合せないわけにまわりませぬ。そはとにかくこゝに引抄せられた「論註」の釋文はそのまま、親鸞聖人が如來にさゝげたまふ表白

であつて、知恩報徳の内感をつまびらかにしたまふものとして味はねばなりません。知恩報徳は歸依して生きる修道者の素潔なこころもちそのものである。如來に歸依して生きるこころはさながら孝子の父母に順ひ、忠臣の君后に順ふごとく、御意のまゝに順隨するこころである。そこで、動靜も出入もすべての生活に不純なごさかしい私心をさしはさまないで、すべてを如來にゆだねるこころである、そして如來のすべてを領納するこころである、如來のすべてを領納するこころは如來の恩徳を信知するこころである、こゝに知恩報徳の生活がめぐまれてくるのであります。こうした感恩の純情がそのまゝ、迸つて雄麗な讃歌となつたのであります。地上にめぐまれたすぐれた讃歌のうちでも、これは永遠にほろびざる生命の讃歌として萬人の胸に共鳴することゝ信じます。この『正信念佛偈』はいふまでもなく親鸞聖人の己證であり獨自の體驗である。けれども、それはちいさな獨斷ではない、親鸞聖人だけに眞實の生命となつて餘他の賢聖には眞實の生命とならないといふのではない、偈前の文にも聖人が自ら仰せられたやうに、この一偈の始終は全く大聖の眞言と大祖の解釋の祖述であつ

て、まことに三國の祖師おのゝこの一宗を興行す、愚禿すゝむるところさらに私なき公明な眞實である、普通の生命であり、客觀的威權を帯びた實在の風光であります。一切の賢聖の胸に芽えた嫩葉が親鸞聖人の胸にうるはしい生命の花として咲いたのであります。従つて親鸞一人の生命が萬人の生命となつて實を結ぶのであります。そこで、親鸞聖人の『正信念佛偈』がそのまゝ、萬人の『正信念佛偈』となつて普及せらるゝことは、きはめて自然な風趣であるともうさねばなりません。上來、大略、撰述せられた聖人の内感なり動機なりを窺ひました。

本文に入るに先つて、もうひとつ、題號を窺ひませう。題は一部の總標であるとは古來いひならはしてきたことで有理なことであります。『正信念佛偈』なる題號には一偈の本質がはつきりしめされてあります。要約して解釋すれば『正信念佛偈』とは「念佛を正信する偈」すなはち「正しく念佛を信する偈」といふことであります。親鸞聖人はみづから『尊號眞像銘文』には「愚禿親鸞正信偈にいはく」と標せられて、『正信偈』と略稱せられてあるところをみて

「念佛を正信する偈」といふ依主釋によつた方が適當であります。「歎異鈔」の第二節にあらはれた親鸞聖人の信仰表現はそのまゝ「正しく念佛を信する」といふことの親しい註釋と味ふてもよからうとひそかにおもふのであります。即ち、「歎異鈔」には「親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人(法然上人)のおほせをかふむりて信するほかに別の仔細なきなり」とまうされてあります。かくて法然上人の「南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本」の宣説に隨順して「本願名號正定業、至心信樂願爲因」の信に生きられたのである。かくて念佛爲本の師教から

### 唯信獨達の己證

へと至純な開展をとげさせられたのであります。題號を綿密に味へばいよくその旨趣がさやかにのみこめます。まづ「正信」とは「疑ひなく正直に信すること」である、凡ての疑ひをはなれてまともに信することである、如來はつねにわれらにまともにまつすぐに正直にはた

らきかけてくださつてある、しかもわれらはいつもいろいろひねくれた邪偽のはからひをまじへて居るところに疑ひの隔離があるのである、だから、「汝一心正念にして直ちに來れ、われよく汝を護らん」(「散善義」)と仰せらるゝ如來のおほせに向つて「正直心にして邪偽雜ることなし」(「信卷」)とひざまづくのが信の「正」なるものであります。そして「信」とは親鸞聖人は「信はうたがふころなきなり」(「唯信鈔文意」)といひ、「信心は如來の御ちかひをきゝて、うたがふころのなきなり」(「一念多念證文」)といひ「疑蓋、間雜あることなきが故にこれを信樂となづく」(「信卷」)とのたまふ。つまり、疑ひのはれたのが信であるそして疑ひのはれるのは疑ふべからざる眞實のみりの顯現である。仍つて、また「信は即ち眞なり實なり誠なり云々」(「信卷」)と仰せられた、そして、かゝる眞實誠心は虛假不實の凡夫のうちに孕まれてはゐない、それは廻施せられたるころであり、惠まれたる生命である。これを示されて「信心といふはすなはち本願力廻向の信心なり」(「信卷」)と仰せられました。詮ずるところ「信」は信心である、この信心はひとつに疑はぬころである、ふたつには「まことのこ



「ろ」である。前者は信心の機受をしめし後者は信心の本質をしめしたものであります。次に「念佛」といふはいろくくに解釋もされる『法華妙贊』によると念を語念と心念とにわけてある。また『行願品疏鈔』によると稱名念佛、觀像念佛、觀想念佛、實相念佛の四種にわけてある。けれども、純正な淨土教でいふときは聖者的な觀念主義の念佛でなくて凡人的な稱念主義の念佛である。すなはち念佛とは「佛名を稱念すること」である、南無阿彌陀佛をとへることである稱名のことである。「念聲これひとつなり」「選擇集」とはこの意味をしめされたのである。しかも「念佛まうさんとおもひたつころ」はそのまゝ信心である。そこで、聖人が「尊號眞像銘文」に「尊號を念す」といふについて「念すといふはふかく信するなり」と仰せられてあります。この信心がおればおのづから稱名となつてあらはるゝ、ころのうちにある信心、かたちのうへにあらはれて稱名、しかもその本質にうちこんでみれば南無阿彌陀佛の名號そのものに歸してしまふのであります。これによつて、聖人は「稱名はすなはち憶念憶念はすなはち念佛、念佛はすなはちこれ南無阿彌陀佛なり」「行卷」と仰せられました。

た。かくて、念佛は名號と信心と稱名との三法を圓具することになるが、當面は稱名行である、「大行とはすなはち無碍光如來の御名をとふるなり」「行卷」と仰せられたとほりである。但し、その稱ふる言葉に大行としての價值があるのでない、稱へらるゝ名號が大行としての價值を有するのであります。仍つて「念佛を正信する」とは「南無阿彌陀佛の妙行を眞實報土の眞因なりと信する眞實の信なり」「教行信證大意」と味はねばならぬ。これを要するに「正信念佛」といふことは正しく御名のおんはからひを信するといふことになるのであります。最後に「偈」とは梵音の伽陀の略で、ほめたゝふる頌のことです。生命の律調をそのまゝ傳ふるには散文よりも韻文がふさはしいから偈の形をとられたのであります。さて一偈はさきにのべたごとく、六十行一百二十句あるのであります。

### 正信偈の組織

はいかなるものであろうか、これに就ては、權威ある存覺上人の『六要鈔』の大科を左に引抄

しておきませう。いはく

正信偈百二十句、行の數六十、それ三朝高僧の解釋によりて、ほど、一宗の要義をのぶ。偈の初句より無過斯に至るまで四十四句二十二行はこれ大經の意。印度以下四句二行は總じて三朝の祖師おなじく淨土の教をあらはす意を標す。釋迦以下一十二句六行の文はこれ龍樹の讚、その初四句は楞伽經に依り次の八句はこれ十住毗婆娑論に依る。次の十二句六行の文はこれ天親の讚、『淨土論』に依る。次の十二句六行の文はこれ鸞師(曇鸞)の讚(論註)に依る。次の八句四行の文は綽公(道綽)の讚、『安樂集』に依る。次の八句四行の文はこれ(善導)大師の讚。次の八句四行の文はこれ惠心の讚、『要集』の意に依る。次の八句四行の文は(源)空聖人の讚『選擇集』に依る。次の四句はこれ總結なり。

### (第三) 南無歸命のこゝろ

#### 親鸞聖人の信念

はいかなる風趣のものであるか、「歸命無量壽如來、南無不可思議光」といふ「正信念佛偈」の發軔の二句はよくこれを表明して居ります。すなはち「無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる」といふのが、全人格をうち出された歸敬のおことばであり、全信念の結晶せる表現であります。これは偈頌のかたちをとつてあるから、二句にわけてあるがつまり同じことをくりかへされたのであります。無量壽如來といひ不可思議光といふ、これは阿彌陀如來の御名である。この御名に南無歸命したてまつるといふことであります。つまり絕對救濟の靈能をあらはしたまふ如來を仰ぐ絕對依憑の信心であります。この二句のくわしい註解は蓮如上人の撰述せられた『正信偈大意』に示めされてあります。たいへんやさしく、またわ

かりやすく御しめしめされてありますから、こゝに拜誦することいたします。すなはち左のとほりであります。

「歸命無量壽如來」といふは、壽命の無量なる體なり。また唐土のことばなり。「阿彌陀如來に南無したてまつれ」といふところなり。「南無不可思議光」といふは、智慧の光明のその徳すぐれたまへるすがたなり。

「歸命無量壽如來」といふはすなはち南無阿彌陀佛の體なりとしらせ、この南無阿彌陀佛とまふすはこゝろをもてはかるべからず、ことばをもてまよふべからず、この二つの道理きはまりたることを「南無不可思議光」とはまふしたてまつるなり。

これを報身如來とまふすなり。これを盡十方無碍光如來となづけたてまつるなり。この如來を方便法身とはまふすなり。方便とまふすはかたちをあらはし御名をしめして衆生にしらしめたまふをまふすなり。すなはち阿彌陀佛なり。この如來は光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ不可思議光佛とまふすなり。

この如來、十方微塵世界にみちくたまへるがゆへに無邊光佛とまふす。しかれば、世親菩薩は盡十方無碍光如來となづけたてまつりたまへり。

されば、この如來に南無し歸命したてまつれば、攝取不捨のゆへに、眞實報土の往生をとぐべきものなり。

この御註解によつてあきらかに窺はれるとほり、この發軔の二句はかぎりなき「いのち」とはかることのできぬ「ひかり」を圓具したまふ絶對救済の阿彌陀如來の御名を信じられた親鸞聖人の全生命をうち出されたものであります。仍つて、こゝにその信心すなはち南無歸命のこゝろを讃仰することにいたします。まづ、その語義からのべませう。

### 南無と歸命は同意語

であります。すなはち南無は梵音をうつしたものであり、また歸命はその漢譯の語であります。南無は曇謨とも那謨ともかく、梵音ナマン Namah の音譯であります。この語原はナム

Nam である、ナム Nam は禮するといふことである。このナム Nam といふ語原にアスといふ語尾を加へてかたちづくられたものである、これは敬禮とも歸命とも歸敬とも救我とも度我とも義譯されます。いまはそのうちの歸命をあげたのであります。そこで今偈は原音と義譯とのふたつを並べあげられたわけでありす。この南無歸命はすべての宗教のオメガでありアルファである。一代の佛教といふも詮じつめたらこの歸命に結歸するのであります。したがつて、この歸命のころは多義を含蓄して居る。否な、多方面から觀察せられて居ります。あたかも、ひとつの富士が見方の相違もしくは觀察する立場の相違によつて、三十六景となり、四十八景となる如く、歸命のひとつがいろいろの見地から、いろいろに體感せらるゝことによつて、いろいろな釋義を生じてまゐります。佛教にいろいろな宗派なり學派がわかれて居りますが、それは歸命に對する解釋の相違から出發してゐると見てもあながち不當でもありません。だからして、すべての釋義を列擧する煩にもたえない、また、一朝一夕にもできかねます。仍つて、いまこゝにあらゆる釋義を大凡三つの見地に統括して、そ

の三つの見地からして代表的な歸命觀を比較し、そのうちで、わが親鸞聖人の歸命觀はいづれに屬すべきものであるかをあきらかにしたいとおもふ。これやがて一代佛教もしくはすべての宗教における親鸞聖人の地位をうかゞふことにもなるわけでありす。それではいはゆる三つの歸命觀とはどんなものであるか、最初に要約してまうせば

### 解・行・信の三見地

からあらはれきたる歸命觀でありしこと。  
 (一) 解の見地からするとき、歸命とは觀念的還元のところになります。このときは「歸」とは「歸還」のころであり、「命」とは「命根」のころである。われわれ凡夫のちいさな命を佛や悟の大きな命の源に還入すといふころであります。われらのちいさなさまよへる主觀を翻して法界の根本主觀に還元するのが宗教的究竟の境地であり、それが歸命のころであるとするのであります。おなじく日本の淨土教のうちでも、西山派の見解はこれに屬すべ

きものであります。「いま淨土門の歸命は十方衆生の生死無常の命を捨て、無量壽覺の涅槃常住の本家に歸するなり」(觀音の「竹林鈔」卷下抄出)とあるはその風趣をしめすものであります。

(二) 行の見地からするとき、歸命とは進修的趣向のころであります。このときは「歸」は「歸投」のころであり、「命」は「身命」のころであります。すなはち、身命を歸投するのが歸命で、人間が佛に向つて身命をなげ出しさへげて救護を希求する眞劍さをしめすものであります。おなじ淨土門のうちでも、鎮西派はこれに配分さるべきものであります。「われ彌陀法中に於いてたとひ命をつくすといへども、全く悔ゆることなかるべし、ゆえに重き命をもつて歸向す」(了慧の「選擇大綱抄」卷上抄録)といふときはこの流派の色彩をしめすものであります。

(三) 信の見地から仰ぐときは歸命とは絶對的隨順のころであります。このときは「命」とは如來の「勅命」であり「歸」とはわれらの「歸順」であります。わが親鸞聖人の眞宗の立場はす

なはちこれであり、親鸞聖人の撰述せられました「尊號眞像銘文」には「歸命は南無なり、歸命とまうすは如來の勅命にしたがひたまつるなり」とのたまひ、また「南無はすなはち歸命とまうすことばなり、歸命はすなはち釋迦彌陀の二尊の勅命にしたがひ、めし(召)にかなふとまうすことばなり」とのたまふはこれであり、すなはち如來のおほせをまうけにする信心であり、如來のお思召にかなふすなほな依憑であり、御意のまゝに生かされて生きる隨順のころであります。かくのごとく、三つの見地から、即ち、「解」と「行」と「信」との立場から觀察され體感さるゝときに、おのづから風趣を異にします。「解」のときは「還源の歸命」となり、「行」のときは「趣向の歸命」となり、「信」のときは「隨順の歸命」となり。各々その特徴はみとめなくてはならないが、宗教の本質は絶對救済の純他力にましますとき「還源の歸命」も「趣向の歸命」もしつくり適應するものではありません。たゞ「隨順の歸命」のみが純眞な全き意義をしめすものであります。何となれば、「還源」は觀念的轉機としての解學であつて、智見をひらきうる賢者のみの知的解脱であります。また「趣向」は行業

的轉機としての修行であつて、之れを履踐しうる善人のみの行的徹底であります。従つて、しりぞいて達観する「知目」とすんで徹底する「行足」とを要します。知目行足の圓具せる賢善の聖者がこれらの歸命觀によつてみちびかれるかも知れませぬ。けれども知目もつづれば行足もくぢけたる愚惡の凡夫はとうていすくはれない。愚惡の凡夫はこのまゝ救はるゝ絶對救濟の本願をあふいで、ありのまゝに隨順する絶對依憑の信心によつてめざめるのであります。宗教の神秘の扉は「解」の鍵でひらけるのでなく、「行」の手力でひらけるのでもない。神秘の聖扉は内からひらけてくる、他力廻向の開展であります。この他力廻向の旨趣にかなふ「信」こそ宗教的の純眞なる轉機であります。歸命は信念であるとはすべての人々の解しうるところであるが、こは形容のうへでの解義であつて、信心の内質を純化してしめされたのは、親鸞聖人でありました。すなはち「歸命は信心である」といふことは「信心は隨順である」といふことによつてはじめて究極するのであります。かくて親鸞聖人によつてほんとうの宗教が眞面目をあらはしたのであります。すんで聖人の一流に於ける歸命のこゝろについて、もつ

とくわしくのべませう。眞宗にては歸命は隨順の信心であるといふことが、明白な要義であります。これを中心にしてその體をあふぎ、その相をかへりみればそこに亦たおのづから、「禮拜」と「隨順」と「勅命」との三趣を内展することができます。仍つて、以下、その歸命の三趣についての感懐をのべませう。まづ

### 歸命は禮拜である

といふことを味ひませう。歸命の語義はさきにのべたとほり、ナムNAMといふことで禮拜を意味するといふことが趣のふかいことでもあります。そこで先聖は歸命は禮拜であるといふされました。すなほに如來に歸順する人々の生活振はおのづから恭敬の生活となり禮拜の生活となり合掌の生活となります。謙敬聞奉行の宗教生活においては禮拜こそ純眞なすがたであります。如來に歸命する人はきつと禮拜の人となるによつて歸命は禮拜なりとまうされたので、禮拜は歸命のすがたであり、外相であります。禮拜の生活こそほんとうにこゝろのお

ちつく生活であり、ほんとうに如来を拜見される態度であります。いな、如来のまへに立つたとき人間にゆるされるたつたひとつの姿容は禮拜であり、合掌であります。觸れるものは如来を仰ぐことのできない呪はれた存在です。われらは大地にひさまづいて拜みませう。拜むことは人間にめぐまれたもつとも美しい姿であります。禮拜ほど宗教的な態度はありません。こゝろみに『増一阿含經』をひもとくと、禮拜に五つの功德を列挙してあります。(一)禮拜するものは佛の圓滿な相好をおがんで歡喜のこゝろをおこし、渴仰の念を生ずるに因つて、來生には端正な相好をそなへる。(二)禮拜するものはおのづと佛のたうとき御名を稱ふるによつて、來世には微妙な音聲をなす(三)禮拜するものは佛にうつくしい華や匂のいゝ香を献供するによつて、來世には豊富な財寶をうる。(四)禮拜するものは大地にひさまづいて合掌してこゝろから佛を尊敬するから、來世には他人から尊敬される長者となれる。(五)禮拜するものは佛をほめたゝえて恭敬のこゝろをもつて佛を執持するから、來世にはよき世界にたかめられてゆく。これらの功德は功利的に豫定すべきものではない。豫定しては禮拜の

純真さが見失はれやう。けれども、禮拜の生活が内具する價值を具體的に象徴したとすれば趣のある記述であります。かくて、すべての宗教に禮拜を重視いたします。とりわけて大地にひさまづいて、めぐまれて生かされてゆく謙敬な奉行者としての眞宗の行人はこの禮拜生活によつて純化されるのであります。そして、禮拜は歸命の外相として廻施せらるゝことをよころばねばなりません。次に

### 歸命は隨順である

といふことは、さきに大要をのべたとほりであります。隨順とは如来のおほせにしたがひ、召にかなふことである。つまりおまかせすることである。自分のちいさなはからひを容れず如来のおんはらひにおまかせするこゝろであります。だから隨順とは絶對的な受納であります。絶對的な受動によつて絶對的な能動をうけ入れるのであります。絶對的な救済の慈悲に對しては素直に救はれてゆくより外にみちはないのであり素直に救はれてゆく人のこゝろに救

はんとちかひたまふ慈悲が純全に領會せらるゝのであります。全人格をうちませて全生命をうけとるころであります。愛は掠めて奪取されるものでもなく媚びて貪れるものでもない、すなほに愛をうけ入れるものだけが愛をうけとるのであり、はからず愛せらるゝものゝみ、愛にすべてをまかせ委ねたころがたゞよく愛を占有しうるのであります。如來のお慈悲にうちむかふものもまた、この機微を味はなくてはなりません。「なんぢ一心正念にして直ちに來れ」の勅命のまへにかれをおもひ、これをわづらふは不純であります。「一心直來」の本願のまへには「凡夫直入」の隨順があるだけであります。そのまゝ救ふの「直來」のまへにはこのまゝ救はるゝ「直入」の信があるだけであります。これが眞實の佛弟子の態度でありま

す、果せるかな、善導大師は眞佛弟子を釋して、「仰ぎねがはくば、一切の行者等、一心に唯佛語を信じて、身命をかへりみず、決定して行によりて、佛の捨てしめたまふものはすなはち捨て、佛の行ぜしめたまふものはすなはち行じ、佛の去かしめたまふところはすなはち去く、これを佛敎に隨順すとなづく、これを佛意に隨順すとなづく、これを佛願に隨順すとな

づく、これを眞の佛弟子となづく」(「散善義」)とおほせられました。

### 歸命は勅命である

といふのは親鸞聖人の独自の發揮であります、『御本典』の「行卷」に「歸命は本願招喚の勅命なり」とおほせられたのである、これは信心の本質を示されたのであります。如來のおほせに隨順するの信は如來のおほせそのものゝ開展であります、然り而して如來の勅命すなはち如來のおほせとは善導大師の二河白道の譬喩によれば「汝一心正念にして直ちに來れ、われ能く汝を護らん」と表示されてあります。これすなはち絶對救済の本願を發露されたおよび聲であります。親鸞聖人は「愚禿鈔」にこの招喚の勅命を表示せられた善導大師の釋文を註釋せられました、次のごとく仰せられました。

「西岸上人喚曰、汝一心正念直來、我能護」といふは「西の岸の上に人ありて喚ばふていはく」とは阿彌陀如來の誓願なり。「汝」の言は行者なり、これすなはち必定の菩薩となづく



(中略)「一心」の言は眞實の信心なり。「正念」の言は選擇攝取の本願なり、また第一希有の行なり。金剛不壞の心なり。「直」の言は廻に對し迂に對するなり。また「直」の言は方便假門をすて、如來大願の他力に歸せんとなり、諸佛出世の直説をあらはさしめんとおぼしてなり。「來」の言は去に對し往に對するなり、また報土に還來せしめんとおぼしてなり。「我」の言は盡十方無碍光如來なり、不可思議光佛なり、「能」の言は不堪に對するなり、疑心の人なり。「護」の言は阿彌陀佛果成の正意をあらはすなり、また攝取不捨をあらはすかほばせなり、すなはちこれ現生護念なり。

これを要するに、まことの救ひをあらはし、絶對他力の救ひを宣明したまふたものであります。蓮如上人はこの義意をうけさせられていとねんごろに且つわかりやすく「阿彌陀如來のおほせられけるやうは、末代の凡夫罪業のわれらたらんもの罪はいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をばかならずすくふべしとおほせられたり」(『御文章』)とのべさせられました。かくの如く、禮拜と隨順と勅命との三義あるけれども、そはひとつの信心の三相

であります。信心の當相は隨順の依憑である。その本質は招喚の勅命である。そしてその形容は恭敬の禮拜であります。すべてこれ、凡夫のはからひをのけて、私心をさしはさます他力本願の旨趣に乗托する一念の體感であります。

### (第四) 眞實の如來を仰ぎて

#### 親鸞聖人の歸敬

したまへるところは眞實の如來であります。どんなものでも拜んだらいふやうな無批判なものではない。親鸞聖人は『化身土文類』の下巻の冒頭に、眞僞を勘決して「涅槃經にたまはく、佛に歸依せんものは、つゝにまたその餘のよろもろの天神に歸依せざれ」と仰せられました。これを歸依すべきは佛のみであつて、佛に歸依する生活のみが眞實であることを示し、佛よりほかの神々に歸依することは邪僞におちいることである。餘他の偶像にひさまづくかぎりはまことに佛を仰ぐことができないのであると批判せられたのであります。而して、佛に歸依する生活においても、更らに内省すべきものがある、蓋し、おなじく佛といつてもそこに眞實と方便との分判すべきものが存在するからであります。かくて聖人は眞佛

土と化身土とを分別し、その眞佛土はいかなるものであるかを總標して「つゝしんで眞佛土を按ずれば、佛はすなはちこれ不可思議光如來なり。土またこれ無量光明土なり」(眞佛土卷)とのたまひ、また化身土とはいかなるものであるかをしめして「つゝしんで化身土をあらはさば、佛といふは無量壽佛觀經の説のごとし、眞身觀の佛これなり。土といふは觀經の淨土これなり、また菩薩處胎經等の説のごとし、すなはち懈慢界これなり、また大無量壽經の説のごとし、すなはち疑城胎宮これなり」(化身土卷)と仰せられました。わが聖人の歸敬したまへるはいふまでもなく眞實の不可思議光如來でありました。いまこの『正信念佛傳』の發軔の二句はまさにこの眞實の如來に歸敬したまへる眞實の生命の發露であります。すなはち、南無歸命の對象となれるは「無量壽如來」であり「不可思議光」である。「眞佛土卷」にはとくに大悲攝化を讃仰して不可思議光如來だけをあげさせられてあるが、今の偈はそれをくはしくして光明と壽命とのふたつの徳號を標示されてあります。而して、「眞佛土卷」には光明無量の願と壽命無量の願とをあげ、さらにこの眞佛はこの二願に酬報したまふことを示し

て「しかればすなはち大悲の誓願に酬報す、かるがゆへに眞の報佛土といふ、すでにして願います、すなはち光明壽命の願これなり」と仰せられてあるから、今この『正信念佛偈』の發軔の二句にあらはれたる眞實の如來は、『御本典』の「眞佛土卷」にあらはれたる眞實の佛格そのものを開顯せられた御名であることは明白であります。

### 佛格の眞實と方便

とはいかにして分別せらるゝのでありませうか、まづ、それをうかゞふておきたいとおもふ。一言にして要約すれば圖像的觀念や分量的制限のもとに固定せられたものは化身佛であつて、眞報身はかゝる固定と制約を超越したまふものであるといふのが、聖人の批判の基調であります。故に、聖人は觀經にあらはれたる第八像觀の佛をば隨機現の佛とせられた、第八像觀の佛とは丈六尺の佛像で、通常世に存する佛像の阿彌陀佛である。一丈六尺は釋尊の身順で當時の人身に二倍すと稱せられる、そこで超人の釋尊に准じて佛像は一丈六尺につ

くる。また、ときには人身の分量に准じて八尺につくることもあります。これらは衆生の根機に隨應して顯現したまふ佛であつて、衆生の主觀化された分量の制約を帯びるところから化佛とせられたのであります。さらに、かゝる批判の様式を徹底してこれまでの淨土教家が眞報身であるとなへた觀經の第九の眞身觀の佛をも帶化の佛とせられた。即ち、上にのべたごとく「化身は觀經の眞身觀の佛である」と指定せられた。それは第九の眞身觀の佛はたふとい佛であることはいふまでもありませんが、しかもなほ六十萬億那由他といふ身量を制約せられてあるからであります。これはまことにきつぱりした鋭い批判であります。而して眞報身はこれらの數量を超越したものであることをしめして「無量にして無限なる佛格、人間の思慮分別をこえた不可思議光如來である」と仰せられたのであります。それでありますから、いまこの『正信念佛偈』に歸敬の對象たる佛格を讚嘆して「無量壽」といひ「不可思議光」とのたまふは、たゞ神秘的形容でなくて、數量的制約を超越したまふ眞實の佛格を表現したまふものであることを知らぬばなりません。

### 壽命無量と光明無量

無量壽とは「はかりなきいのち」といふことであり、不可思議光とは「こゝろもてはかるべからず、ことばをもてときのぶるべからざる光」といふことである。人間の思惟と言議を超越したまふ佛、壽命と光明とを圓備したまふ如來といふことである。つまり壽命と光明とは眞實の佛格の功德と靈能とを表象したまふのであります。如來にはかすかぎりのない功德がある、かすかぎりのない靈能がある、しかるに、なぜ殊に壽命と光明とを以て如來の果徳と靈能をあらはしたまふのでありませうか。これについては先哲すでにいろいろの解釋を試みて居られる。そして、いろいろの義門をひらいて解説してゐられるけれども、その要をとつていへば自利の立場から云つても、利他の方面からいつても、この壽命と光明の二徳が最も佛格を莊嚴するに適切であるからであります。まづ、佛の自利の立場からいへば、佛身にたくさんの徳があるけれども、この壽命と光明によつて統攝することが出来る。すなはち、壽

命は法身常住の體であつて、涅槃の果徳を成就し、光明は佛智觀照の用であつて、菩提の智果を圓成する。つまり、菩提と涅槃との二轉依の妙果を表象するから、この壽命と光明とを以て法身を莊嚴したまふのであります。これ、本願において法身を成就するために第十二願に光明無量をちかひ第十三願に壽命無量をちかはせられた所以であります。次に佛の利他の方面から云つてみると、この壽命と光明とが衆生を攝化したまふ靈能の根本となるのであります。すなはち壽命は豎に三世をつらぬき、光明は横に十方をつらぬく。横豎にわたつての攝化を果したまふことが出来る。なほ且つ、衆生の要求するところのもの、根本は生命と明智とであるから、その要求を充足したまふところにすべての衆生を救ひたまふ靈能があるのであります。こゝに於いてか、親鸞聖人は『正像末和讃』に「超世無上に攝取し、選擇五劫思惟して、光明壽命の誓願を、大悲の本としたまへり」と讃嘆せられました。また法然上人も『三部經釋』のうちに「光明あまねく十方世界をてらして、一切衆生にことごとく縁をむすばしめんがために、光明無量の願をたてたまへり(乃至)ひさしく衆生を濟度せんがために、

壽命無量の願をたて給へり」と仰せられました。かくて、完全なる佛格の莊嚴はそのまゝ完全なる救済の靈能として感佩しなくてはなりません。

### 草庵生活の表象

更に、この『正信念佛偈』の發軔の二句を拜誦するとき、親鸞聖人が草庵にわびつゝ、名號本尊にひざまづきたまふ實生活を偲ぶのであります。否、親鸞聖人の御草庵の修道生活がそのまゝ「歸命無量壽如來、南無不思議光」の偈頌となつてあらはれたのであると感ぜられます。親鸞聖人はいはゆる「僧」でなかつたと同時に、いはゆる「寺」をつくつて住まれたお方はありません。「寺」にくらして驅る教役者でなくあくまで修道の沙彌として一生を貫かれた聖人には、「草庵」こそことにふさはしい環境でありました。國府の草庵とか稻田の草庵とかいふものはすべてなつかしい思出であります。また、折にふれて御同門、御同行たちと道を語合はれるにも、決して立派な堂舎をかたちづくられたのでなかつたのである。高田の如

來堂とか、桑子の太子堂とか、木部の毘沙門堂とか、いづれもさゝやかな辻堂のなかに所在の道友と道をかたり合ふてくらされたのであります。こんな風に、辻堂や草庵のうちに一生をおくられた沙彌生活であるから如來を背にして民衆に向ふて説教する教役者のそれとはすつかり、趣を異にして、つねに同侶と共に如來にひざまづく生活でありました。すなはち、草庵の生活はそのまゝ眞實の如來にひざまづく隨順の生活であり歸敬の生活であります。聖人の生活はあくまで純眞なる「歸命無量壽如來、南無不思議光」の生活でありました。且つ、草庵に安置せらるゝ御本尊は、かのうるはしく莊嚴せられた堂舎の内陣に安置せらるゝものと、おのづから様式を異にするやうになります。そこで、聖人は御本尊として名號をえられました。名號本尊をかゝげられたのは、蓮如上人が「當流には木像よりは繪像、繪像よりは名號とまうすなり」(『御一代記聞書』)と仰せらるゝごとく、繪像や木像の形像本尊はひさしく偶像的な因襲にとらはれてゐるところからかゝる偶像的因襲を越えて眞實の佛格を解放せんとする批判的態度をうかゞふこともできるが、草庵の生活に住せられた爲め素純に

して簡易な名號本尊をえらばれた現實的機縁であることを忘れてはならないとおもふ。かくのごとくにして草庵のうちに名號を本尊としてひさまづきたまふ御一生が、そのまゝ象をとつたとき、この『正信念佛偈』の發軔の二句となるのであります。南無歸命は聖人のひさまづける信仰のすがたであり、無量壽と不可思議光はそのまゝ草庵にかゝげられし名號本尊であると観ぜられるからであります。

### 眞實の體驗者

名號本尊には凡そ三種あります、歸命盡十方無碍光如來といふ十字名號と、南無不可思議光佛といふ九字名號と、南無阿彌陀佛といふ六字名號とであります。そして南無阿彌陀佛の六字名號は正覺の果名であり佛の本名であります。しかもこの六字名號はいろいろの淨土教家のひとしく讃仰するところであるけれども、往々にしてその眞實の功德相を見失ふものもあつた。そこで、天親菩薩の『淨土論』にあらはれたる歸命盡十方無碍光如來といふ十字名號

と、曇鸞大師の『讚阿彌陀佛偈』にあらはれたる南無不可思議光佛といふ九字名號をもつて、六字名號の眞實の功德を開顯せられたのであります。そのうち十字名號は積極的に證した徳號であり、九字名號は消極的に表證した徳號である。積極と消極との左右はあるけれども、共に六字名號の徳義をあらはしたものであります。かくて、親鸞聖人は一般の淨土教家の手によつて偶像化せられたる六字名號を純化して、その眞實の功德を讃仰すべく殊に十字名號と九字名號とを以て眞佛を標示されたのであります。蓮如上人以後、今日では九字十字はむしろ脇掛となつてゐるが、原始の眞宗教團にてはそれがむしろ本尊として主位をしめたのであります。「凡そ眞宗の本尊は盡十方無碍光如來なり」(『改邪鈔』)とあるのをみても、聖人が十字名號を尊重して本尊とせられたことがわかります。また、前に引抄した『愚禿鈔』にも、二河白道にあらはれた彌陀招喚の「我能護汝」の我を解して「我の言は盡十方無碍光如來なり、不可思議光如來なり」と仰せられました。またさきに引證したごとく『眞佛土卷』の眞佛を標定するに九字名號をもつてせられました。されば、親鸞聖人は九字の徳號をもつて、

いよいよ六字名號の眞實の價値と靈能をしめし、眞實の佛格をあきらかにせられた次第であります。さて、こうした見方をうつしてこの『正信念佛偈』の發軔の佛號を注意するとき、同様の趣致を掬うことができるのであります。無量壽如來といひ不可思議光といふ、これ南無阿彌陀佛といふ梵音の義譯語であります。阿彌陀佛とはかぎりなき壽命とかぎりなき光明とを具備したまふ覺體の義である。しかも、こゝに六字名號をそのまま出さず義譯をあらはされたのは、これによつて、いよいよ眞實の佛格に具有したまふ眞實の功德を讃仰せられたので『正信偈大意』に「歸命無量壽如來といふは、すなはち南無阿彌陀佛の體なりとしらせ、この南無阿彌陀佛とまうすは、こゝろをもてはかるべからず、ことばをもてとよむべからず、この二つの道理きはまりたることを南無不思議光とはまふしたてまつるなり」とあるはこの義を暗示せられたものである。たゞ漠然と梵名の義譯の語をあげられたのであると解し去ることのできない綿密な用意がひそんでゐる。すなはち、十字名號を仰いで本尊とし九字名號をもつて眞佛を標定せられた意蘊と相通するものがあることをおもふのであります。

仍つて、『正信偈大意』には、上の註釋にひきつゞいて、「これを盡十方無碍光如來となづけたてまつるなり、(中略)すなはち阿彌陀佛なり、この如來は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ不可思議光とまふすなり」と示されてあります。これを要するに、眞實の信によつて眞實の佛を仰ぎ、眞實の佛格を信仰して眞實の生命に參徹された親鸞聖人はあくまで眞實の體験者でありました。そして、その眞實の體験を端的にうち出されたのが、この『正信念佛偈』であり、その結晶せるものが「歸命無量壽如來、南無不可思議光」といふ二句の歸敬であります。

### (第五) 法藏因位の本誓

#### 眞宗の根本聖典

たる『大無量壽經』は一代佛教の肝腑を顯示するものであり、眞宗の恭敬する七祖(龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空)は三國の賢聖の精華たるものである。換言すれば『大無量壽經』は最高の「法」であり、三國の七祖は至純の「人」である。この「法」と「人」とを經緯として開顯せられたる眞實の大道こそまさにこの淨土眞宗であります。こゝに於てか、淨土眞宗の根本要義を表証したまふこの『正信念佛偈』はこの「法」と「人」とに依據して編まれてあります。すなはち、今偈の正宗分の前半は依經段(法藏菩薩因位時より難中之難无過斯まで)とて大經の綱要をしめし、後半は依釋段(印度西天之論家より必以信心爲能入まで)とて七祖の釋論についてのべられてある。今偈の組織のうへにも周到なる用意を窺ふのであります。

さて依經段の組織は親鸞聖人の大經觀をそのまゝあらはしてある。「それ眞實の教をあらはさば即ち大無量壽經これなり。この經の大意は、彌陀、誓を超發してひろく法藏をひらき、凡小を哀んでえらんで功德の寶を施することをいたす。釋迦、世に興して道教を光闡して群萌をすくひ、めぐむに眞實の利をもてせんと欲してなり。」(顯淨土教行證文類)と仰せられてあるごとく、親鸞聖人は『大經』のうへに『來れ』といふ彌陀の招換と「去け」といふ釋迦の發遣とをきかされたのであります。そこで今偈の依經段もそれとおなじく、前分に彌陀如來の救濟の靈能を讃嘆せられ、後分に釋迦如來の本懷と勸發を欽仰せられました。さてまづ彌陀如來の救濟の靈能を讃嘆せらるゝにあつて、本願と光明と名號との三様式をもつてせられました。まづ第一の

#### 本願攝受の様式

に對する讃嘆はいかなるものであるか、「法藏菩薩因位時、在世自在王佛所、親見諸佛淨



土因、國土人天之善惡、建立無上殊勝願、超發希有大弘誓、五劫思惟之攝受、重誓名聲聞十方」といふ四行八句がそれでありす。蓮如上人は「正信偈大意」につきのごとく御註釋せられました。

「法藏菩薩因位時、在世自在王佛所、親見諸佛淨土因、國土人天之善惡」といふは、世自在王佛とまうすは、彌陀如來のむかしの師匠の御事なり。しかればこの佛のみもとにして、二百一十億の諸佛の淨土のなかの善惡を親見しましめて、そのなかにわろきをえらびすて、よきをばえらびとりたまひて、わが淨土としますといへるころなり。

「建立無上殊勝願、超發希有大弘誓」といふは諸佛の淨土をえらびとりて、西方極樂世界の殊勝の淨土を建立したまがふがゆへに、超世希有大願ともまうすなり。

「五劫思惟之攝受」といふは、まづ一劫といふはたかさ四十里ひろさ四十里の石を天人の羽衣をもて、そのおもさ、ぜに一の四の字を一のけて三の字のおもさなるをきて、三年に一度くだりて、この石をなでつくせるを一劫といふなり、これを五なでつくすほど阿彌陀

佛の、むかし法藏比丘とまうせしとき、思惟してやすきみのりをあらはして、十惡五逆の惡人も、五障三從の女人をも、もらさず、みなみちびきて、淨土に往生せしめんとちかひまし／＼けり。

「重誓名聲聞十方」といふは彌陀如來、佛道をなりましたさんに、名聲十方にきこえざるところあらば、正覺をならじとちかひましますといへるころなり。

この蓮如上人の御釋文を玩味すれば大意はのみこめることでありませうが、さらにわかりやすくまうしますと次のごとくである。阿彌陀如來はわれらをすくはんがために、法藏菩薩といふ因位のすがたをあらはし、世自在王佛とまうす師匠のほとけのみもとにおいて、おほくの佛達の居られる淨土にうまれたる因や、それらの淨土の國柄や人柄の善惡や勝劣をくわしく御覽なされ、五劫のあいだ思ひめぐらして、そのたくさんの淨土のうちから勝れたるもの善きものをえらびとり、このうへもない世に超えすぐれた誓願をおこし、一切の衆生を救はんと志したまふのであつた、そして念を入れて我名をすべての人々に信じるだけすべて

を救ふやうにしたいと重ねておちかひあらせられました——といふ意味であります。つまり、法藏菩薩の發願をしめして、卓絶せる如來の救濟意志の發願を讃仰せられた一段であります。

### 法藏菩薩とは何ぞや

これ、眞宗の教義を知らんとする人々の知らんとするところの問題のひとつであります。この法藏菩薩の發願の事蹟をつたへた經論はかなりたくさんある、また、これに對する見解もかなりたくさんある、しかし、今はわが親鸞聖人の法藏菩薩觀を的示すればよいとおもふから、その概要をのべませう。法藏菩薩とまうすことによつて明白なるごとく未だ佛果を證せざる因位の修道者のすがたであります。ところが、その菩薩といふ因位の姿は、未だ佛でない人がはじめて佛たらんとするための向上的修道の人格であるか、または、むかしからの佛が人に佛の存在をしらすために人のわかりやすい相に現實化する向下的顯現の佛格であるか

といふに、それは前者でなくて後者であります、人格でなくて佛格であります。もつとくわしく云へば、人格化したる佛格であります、佛でない人が佛になる相でなくて、佛が人にむかつて佛たることを顯示する相であります。人が佛たらんとする自利完成の過程でなくて、佛が人を救はんとする利他救濟の開展であります。久遠の佛格(本質)が十劫の佛格(表現)たらんとする顯現の契機であります。だから親鸞聖人は「大經談」に「南無不可思議光佛、饒王佛のみもとにて、十方淨土のなかよりぞ、本願選擇攝取する」とまうされました。本來から云へば「法藏菩薩」といふ因位の菩薩名を以てすべきところを「南無不可思議光佛」といふ果位の佛號をもつてせられたところを注意しなくてはなりません、これ法藏菩薩は尋常の向上的人格でなくて、超異の向下的佛格であります。この意義を聖人は更につまびらかに示されて『一念多念證文』には「この一如寶海よりかたちをあらはして、法藏菩薩となりのたまひて無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふ」とのたまひ、『唯信鈔文意』には「この一如よりかたちをあらはして方便法身とまうす、その御すがたに法藏比

丘となりのたまひて不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり」と仰せられました。すなはち因果を超越して色もなく形もましまさぬ一如實界は超驗的實在であつて、われら有相の凡夫の信心の對象としてあふぐことができないからそこでわれら有相の凡夫の信心の對象となりうるやうに、名を垂れ形を現はし因果の範疇に開展したまふのであります。これすなはちわれらを救はんがために、われらを救ふ佛をわれら凡夫に示現したまふ方便であります。存覺上人はこれを「果後の方便」であるとまうされました。「果後の方便」であることに気づけば法藏菩薩がいよくありがたく感戴せられます。これを要するに一如法界が人生に開展したまふ利他攝化の契機として法藏菩薩の出現を讃仰しなくてはなりません。この法藏菩薩の因位の本願をつまびらかにすることによりて、阿彌陀佛の果上の名號がわれを救ひたまふことを信じられる、法藏菩薩と阿彌陀佛と因果の範疇に顯はれて、いよく救済の至相を信仰することができるのであります。さてその法藏菩薩の發願修行のありさまを『大無量壽經』のうへにくわしく説かせられてあるが、こゝでは、今偈にあらはれたる範圍に

において、窺ふことにする、諸佛淨土の因と國土人天の善惡を親見して、建立せられた「無上殊勝」の願を超發せられた、「希有の大弘誓」とはいかなるものであるか、康僧鎧の譯本によれば四十八願あります。その

### 四十八願の内容

について、親鸞聖人は『愚禿鈔』に四種の選擇があると仰せられました。いはゆる四種の選擇とは選擇本願、選擇淨土、選擇攝生、選擇證果の四種であります。このうち選擇本願は總稱であつて、餘の三種はまさしく内容を示したもので、選擇淨土とは清淨の佛土を創建せんとするための本願であり、選擇攝生とは衆生を攝受せんがための本願であり、選擇證果とは完全なる佛果を成就せんとする本願であります。佛身と佛土と救済と、この三つが本願の綱要であります。しかも、佛身も佛土もすべて救済の靈能と始終をしめすものに外ならないのであるから、衆生を救済することが本願の眼目であります。「念佛の行者、名號をきかばあ

ははやわが往生は成就しにけり十方衆生往生成就せずば正覺とらじとちかひたまひし法藏菩薩の正覺の果名なるがゆへにとおもふべし。また、彌陀佛の形像をおがみたまつらば、あははやわが往生は成就しにけり、十方衆生往生成就せずば正覺とらじとちかひたまひし法藏菩薩の成正覺の御すがたなるゆへにとおもふべし。また、極樂といふ名をきかば、あはわが往生すべきところを成就したまひにけり、衆生往生せずば正覺とらじとちかひたまひし法藏比丘の成就したまへる極樂よと思ふべし」(安心決定鈔)と、これまことに適切に本願の旨趣にふれたものであります。四十八の誓願があるけれども、すべてわれら衆生をたすけんがために外なりません。この意味において「彌陀の五劫思惟の願をよくく案すれば親鸞一人がためなりけり、さればそこばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」(歎異鈔)とつねに仰せられた親鸞聖人の御持言こそ、端的に法藏の願心を全領せられし法悦であります。本願の内容を詮じつめると衆生救済の一事にきはまる。しからばいかなる方法と様式によつて衆生救済の本願を選択し攝取したまふであ

りませうか、五劫の思惟はまさにこの問題についての御思案であります。法然上人が經を念誦せらるゝときに、いつもこの

### 五劫思惟の文に感泣

せられました、お弟子がそれを訝かしくおもふてたづねると、この愚痴の法然房、十惡の法然房をたすけんがために、五劫のあいだ思惟してくだされたとおもへば、お慈悲のほどが身にしみて涙がこぼれると仰せられたといふ傳説があります。まことに五劫の思惟を凝らし、あらゆる諸佛の淨土を批判して、粗惡をすて、善妙をとりて選擇攝受せられた本願によつてわれらはすくはれるのであります。五劫思惟の文字を誦して涙を流された法然上人は五劫思惟のありさまを『選擇集』にくわしくのべられました。その要旨をのべておきませう。謂く、法藏菩薩は世自在王佛のみもとにあつて、諸佛の國土をみ、その救済の方法をしらべたまふに、あるひは布施をすゝむるもの、あるひは戒律を持たしむるもの、あるひは忍辱をお

しふるもの、あるひは精進をすゝむるもの、あるひは禪定をすゝむるもの、あるひは智慧をすゝむるもの、あるひは持經すること、あるひは寺塔を起立すること、あるひは沙門に供養すること、あるひは父母に孝養すること、あるひは師長に奉事すること、こうしたいろいろの善根といろ／＼の功德をともつて救済にあづかる條件としてゐる。けれども、かゝる救済の條件が規定せらるゝときはどうしてすべての人々が救はれることができない。即ちかくて何等かの條件を要する宗教は一切の人々を救済することの不可能なるを慮らせられて、一切の善惡の凡夫がともにすべて往生することのできるやうに御名の宗教を建立し、名號を信受することによつてすべての救ひを完成せられました。こゝにおいて本願には御名を成就しこれを信受せしめて救はんとちかはせられ、十方の諸佛によつて流布せらるゝことをちかはせられました。すなはち四十八願は名號によつてすべてを救ふことを念願せられたものであります。更に重ねて三つの誓を表白せられました。

(一)われ超世の願を建て、必ず無上道に至らむ、斯の願満足せずば、誓ひて正覺を成ぜじ

(二)われ無量劫において、大施主となりて、普く諸の貧窮を濟はずば、誓ひて正覺を成ぜじ

(三)われ佛道を成ずるに至らば、名聲十方に超えむ、究竟して聞ゆるところなくば、誓ひて正覺を成ぜじ

この第一は成道を誓ひ、第二は救済を誓ひ、第三は御名の普遍を誓はせられたのであります。成佛は救済のためであり、その救済を實現せしむるにはすべての人々に御名を聞信せしめなくてはならぬ、「重ねて誓ふらくは名聲十方に聞えしめん」とあるはこれでありませう。さらに、一切の諸行をえらびすてゝたゞひとへに名號の一行を選ばれたる法藏菩薩の願心を讃仰して法然上人は勝劣と難易との二義をもつてせられました。その勝劣の義といふのは名號は萬徳の結歸する全一的生命なるがゆへに勝れ、餘他の善根はたゞ局分せられたる分析的固定であるから劣る、「初に勝劣とは、念佛はこれ勝、餘行はこれ劣、所以はいかんなれば名號はこれ萬徳の歸するところ、然れば則ち彌陀一佛のあらゆる四智、三身、十力四

無畏等の一切の内證の功德、相好光明說法利生等の一切の外用の功德、皆ことごとく阿彌陀佛の名號の中に攝在するが故に、名號の功德を最も勝となすなり。餘行は然らず、各一隅を守る、これを以て劣となる也。たとへば世間の屋舎の名字のうちには棟梁椽柱等の一切の家具を收む、棟梁等の一一の名字の中によく一切を收むるあたはず(選擇集)とのべて、これによつて劣れる餘行をすて、勝れたる名號の一法を選びとられたのであるといふ、すなはちこれ價値に對する選擇であります。次に、難易の義とは名號はすべての人々のたもちやすきとなへやすき法であるけれども、諸行はすぐれた聖者たちもなほ難しとしたまふところ、よつて、一切を救はんためにすべての人々の易行易修の名號をえらびとられたのであります。いはく、「難易の義とは、念佛は修し易く諸行は修し難し、(中略)若しそれ造像起塔をもて本願となさば、すなはち貧窮困乏のたぐひ定んで往生の望みを絶たむ、然るに富貴の者は少く貧賤の者は甚だおほし。若し智慧高才をもて本願となさば愚鈍下智の者定んで往生の望みを絶たむ、然るに智慧の者は少く愚痴の者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願とな

さば、少聞少見の輩定んで往生の望みを絶たむ、然るに多聞のものは少く少聞のものは甚だ多し、若し持戒持律をもて本願となさば破戒無戒の人定んで往生の望みを絶たむ、然るに持戒の者は少く破戒の者は甚だ多し、自餘の諸行これに準じて知るべし、まさに知るべし上の諸行等を以て本願となさば往生を得るもの少く、往生せざるもの多し、しかればすなはち阿彌陀如來、法藏比丘の昔平等の慈悲に催されて、一切を攝せんがために造像起塔等の諸行をもて往生の本願となさず、唯稱名念佛の一行をもてその本願となすなり(選擇集)これすなはち實踐の上に於ける撰擇であります。かくて最高の究竟的價値を有する生命を、萬機に及ぼす普遍的様式に表現して廻施したまへるものこれ法藏願心の選擇であります。この選擇の願心に隨順して、佛のすてしめたまふはすなはちすて、佛のとらしめたまふはすなはちとりて、素直におまかせするのが眞の佛弟子であります。

### (第六) 無碍難思の光耀

#### 救済の靈能を讃嘆

せらるゝにあたつて、親鸞聖人は本願と光明と名號との三様式をもつてせられたことは、すでにのべたとほりであります。そして第一の本願攝受の様式についてはすでにのべましたから、進んで第二の光明照護の様式に對する讃嘆を窺ふことにします。即ち、今偈に於ける「普放無量無邊光無礙無對光炎王清淨歡喜智慧光不斷難思無稱光超日月光照摩利、一切群生蒙光照」といふ三行六句はまさしくこの光明照護の様式を讃嘆せられたものであります。これ、佛は普く無量光などの十二光を放ちて、塵のやうに數おほき國土をおてらしくくださるから、この世のすべての人々はみなこの御光の照護をかうむつて救はれるといふ意味であります。この尊き光明はもと光明無量の誓願に酬報してあらはれた彌陀正覺の果體に成就すると

ころであつて、『大經』には「無量壽佛の威神光明は、最尊第一にして諸佛の光明の及ぶ能はざる所なり。この故に無量壽佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號けたてまつる、それ衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅して身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ず、若し三塗勤苦の處に在りて、此光明を見たまつれば、皆休息するを得て、復た苦惱なく、壽終りて後、皆解脱を蒙らむ。われ無量壽佛の光明威神の巍巍とし殊妙なるを説かんに、晝夜一劫すとも、尙未だ盡くすこと能はじ」とて、十二光佛を列擧して讃仰せられてあります。釋尊にしてなほ説きつくすことはできぬ神祕の光耀であるけれども、しばらく十二光を以てその徳相を顯せられたのであります。曇鸞大師の『讚阿彌陀佛偈』はこの十二光を以て佛徳を讃嘆せられました。親鸞聖人はこれを『教行信證』の眞佛土卷に引用して眞實の佛格を莊嚴し、さらに『讚阿彌陀佛偈和讃』にもこれを傳承せられ、今の『正信偈』にもかくの如く讃嘆せられてあります。且つ近時發見せられた『彌陀如來名號徳』も親鸞聖人の十二光に對する御註釋で

あります。

これらによつて明白なるごとく、この十二光は親鸞聖人が眞實の佛格を讃仰するとき、つねに依用せられたところであります。上にのべたやうな聖教を熟讀すれば、

### 十二光の解説

はおのづから明白にうなづけるが、今は例によつて蓮如上人の『正信偈大意』によつて窺ふことにいたします。

「普放無量無邊光」といふより、「超日月光」といふにいたるまでは、これ十二光佛の一々の御名なり。

無量光佛といふは利益の長遠なることをあらはす、過現未來にわたりて、その限量なし、かずとしてさらにひとしきかずなきがゆへなり。

無邊光佛といふは照用の廣大なる徳をあらはす、十方世界をつくしてさらに邊際なし、縁

としてとらさずといふことなきがゆへなり。

無碍光佛といふは神光の障碍なき相をあらはす、人法としてよくさふることなきがゆへなり、碍をいって内外の二障あり、外障といふは山河大地雲霧煙霞等なり、内障といは貪瞋癡慢等なり、光雲無碍如虚空の徳あれば、もろくの内障にさへられず、かるがゆへに天親菩薩は盡十方無碍光如來とほめたまへり。

無對光佛といふはひかりとしてこれに對すべきものなし、もろくの菩薩のをよぶところにあらざるがゆへなり。

炎王光佛といふはまたは光炎王佛と號す、光明自在にして無上なるがゆへなり。大經に猶如火王燒一切煩惱薪故とけるはこのひかりの徳を嘆するなり、火をもてたきとをやくにつくさずといふことなきがごとく、光明の智火をもて煩惱のたきとをやくに、さらに滅せずといふことなし、三途黑闇の衆生も光照をかうふり解脱をうるはこのひかりの益なり。清淨光佛といふは無貪の善根より生ず、かるがゆへに、このひかりをもて、衆生の貪欲を



治するなり。歡喜光佛といふは無瞋の善根より生ず、かるがゆへに、このひかりをもて、衆生の瞋恚を滅するなり、智慧光佛といふは無癡の善根より生ず、かるがゆへに、このひかりをもて、無明の闇を破するなり。不斷光佛といふは一切のときにときとしててらさずといふことなし、三世常恒にして照益をなすがゆへなり。

難思光佛といふは、神光の相をはなれてなづくべきところなし、はるかに言語の境界にこえたるがゆへなり、こゝろもてはかるべからざれば難思光佛といひ、ことばをもてとくべからざれば無稱光佛と號す。無量壽如來會には難思光佛をば不可思議光となづけ、無稱光佛をば、不可稱量光といへり。

超日月光佛といふは日月はたゞ四天下をてらして、かみ上天におよばず、しも地獄にいたらず、佛光はあまねく八方上下をてらして障碍するところなし、かるがゆへに日月にこえたり、さればこの十二先をはなちて十方微塵世界をてらして衆生を利益したまふなり。「一切群生蒙光照」といふは、あらゆる衆生宿善あれば、みな光照の益にあづかりたて

まつるといへるこゝろなり。

右の御註釋を玩味すれば、その意義は容易に首肯せられることゝ存じますが、もつとわかりやすく、略して解説をいたしておきます。(一)無量光、これは光明の限量のなきことを示されたのである。すなはち過去現在未來の三世を照して、あらゆる時間に存在する衆生を救済したまふこと即ち時間的の永劫性を象徴したものであります。(二)無邊光、これは光明の邊際なきことを示されたものである。即ち十方世界いたらぬ限なく照さるゝによつて、いかなる境界に存在する衆生をも救済したまふ徳用をあらはし、空間的の普遍性を象徴したものであります(三)無碍光、この光明のまへにはどんな障礙もあり得ないことを示したものである。そしてその障礙には人法とか内外とかいふ風にいろいろの相状もあるけれども、きりつめて云へば衆生の煩惱惡業のことである。「尊號眞像辭文」には「無碍といふはさわることなしとなり、衆生の煩惱惡業にさへられざるなり」と釋されてある。いかなる煩惱惡業にもさへられずすべてを利益したまふ絶對救済を顯彰した徳名であります。而して、以上の三名

は光明の體徳をあらはされたものであります。そのうち、無量光と無邊光とは眞實平等の智慧を體とする光明の縱横にあらゆる時間とあらゆる空間とを網羅することを示し、無碍光は絶對無縁の大慈悲を體とするによつて一切の機類を照護したまふありさまを表現したものでつまり智慧と慈悲、知と愛とを體とする光明の本質的方面を讃嘆せられたのであります。

(四)無對光、この彌陀の光明には對比すべきものゝないことを示し、(五)光炎王、彌陀の光明の諸佛の光明に超えすぐれたまふことを示したものであります。この無對光と光炎王の二つは彌陀の光明の絶對性と卓越性を表示して、光明の徳相の尊高をあきらかにせられたのであります。(六)清淨光、(七)歡喜光、(八)智慧光の三光は光明の妙用を示されたので、序のごとく衆生の煩惱の主體たる貪欲と瞋恚と愚痴とを對治したまふものであつて、無碍光の靈能を開展したものであります「無碍光のひかりには、清淨歡喜智慧光、その徳不可思議にして、十方諸有を利益せり」との讃頌はこのありさまを示されたものであります。(九)不斷光、盡未來際常恒不斷に照護したまふことをしめしたもので「煩惱にまなこさへられて攝取

の光明みされども、大悲ものうきことなく、つねにわが身をてらすなり」の感激を興へたまふ光景をしめしたものであります。(一〇)難思光、(一一)無稱光、この二光は思議すべからず稱説すべからざることをしめし、あらゆる相對的の圖像觀念やあらゆる固定限量を超越したまふ眞實の佛格にまします絶對絶妙を讃仰したまふものであります。最後に(一二)超日月光とは喩顯である。われらの感知する範圍でもつともすぐれた光體は日と月とである。しかもこの日は夜をてらす、月は晝にあらはれぬ。しかも彌陀の光明はかくの如き不完全なものでないことを例示して、最勝の光明をあさやかに示されたのであります。かくのごとく十二光の廣讃は、すべて意味ふかいものであるが、若し夫れ略讃するときは

### 詮要は無碍光佛

にきはまるとは親鸞聖人の躰感であります。かの唯信御坊にあてられた十月廿一日の御消息には「ひとひとのおほせられさふらふ十二光佛の御ことのやう、かきしるして、くだしまい

らせさふらふ、くわしくかきまいらせさふらふべきやうもさふらはず、おろ／＼かきしるしてさふらふ。詮ずるところ無碍光佛とまふしまいらせさふらふことを本とせさせたまふべくさふらふ、無碍光佛はよろづのものゝあさましき、わるきことにはさはりなく、たすけたまはん料に無碍光佛とまうすとしらせたまふべくさふらふなり」としめされてあります。如来の救済の直接表現としてはこの無碍光の御名こそもつとも純全であります。端的に絶對救済の靈能をあふぐことができます。これまでの宗教で罪惡深重といふことは救はれがたい障碍の根本でありました。しかも、かゝる罪障のまゝにて救ひたまふところにこそ、ほんとうの宗教的面目が顯露されるのであります。親鸞聖人はこの無碍光の照護によつてのみ救ひを躰感せられたのであります。さらに、この十二光は親鸞聖人の御依用せられた

### 德號本尊との關係

することが深いものであります。すなはち、聖人は南無不可思議光如来といふ九字名號と

歸命盡十方無碍光如来といふ十字名號とを安置せられました。このふたつの德號はもと曇鸞大師の『讚阿彌陀佛偈』と天親菩薩の『淨土論』とにあらはれたものであります。さらにその根元をさぐればこの十二光佛を綜合せられたもので、九字名號は光明の不可思議の知徳を中心として眞實の佛格を顯彰し、十字名號は光明の無障碍の悲徳を中心として絶對の救済を開闡せられたものであります。而して、この九字名號と十字名號とは互具互成する全一的德號であります。これらのありさまは、さきにのべた『彌陀如来名號德』に鮮明にしめされてあります。いはく「無碍光とまふすゆへは、十方一切有情の惡業煩惱のこゝろにさえられず、へだてなきゆへに無碍とはまふす也、彌陀の光の不可思議にましますことをあらはしらせむとて、歸命盡十方無碍光如来とまふすなり、無碍光佛をつねにこゝろにかけとなえてまつれば、十方一切諸佛の徳をひとつに具したまふによりて、彌陀を稱すれば功德善根きわまりましますまぬゆへに、龍樹菩薩は我説彼尊功德事、衆善無邊如海水とおしえたまへり、かるがゆへに不可思議光佛とまふすとみえたり、不可思議光佛のゆへに盡十方無碍光佛とま

ふすと世親菩薩は往生論にあらはせりと、この文を味ふてみれば聖人が九字名號と十字名號とのふたつの德號本尊を案じて讚仰せられたおこころもちが、あさやかにうかゞはれます。そしてこの二個の德號をとほして如來に直參せられたことは「廣文類」の總序に「難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する惠日なり」とのたまひ、「略文類」の冒頭に「無碍難思の光耀は苦を滅し樂を證す」とのたまへるおこころもちが、具體的に窺はれます。

(第七) 名號念持の信樂

本願と光明と名號

これは救済の靈能を讚嘆せらるゝ三様式であること、及び、そのうちの本願接受の様式と光明照護の様式とについては、すでにのべましたから、つゞいて名號念持の様式についての讚嘆をうかゞふことにいたします。「本願名號正定業、至心信樂願爲因、成等覺證大涅槃、必至滅度願成就」の二行四句は即ちこの名號念持の信心についての讚嘆であります。この四句を阪東本の御本典の御點聲によつて延書すると、「本願の名號は正定の業なり、至心信樂の願を因と爲す、等覺を成り、大涅槃を證することは、必至滅度の願成就なり」といふことになりす。更に親鸞聖人は「尊號眞像銘文」のうちにこの一節をみづから和註しておられますから、それをとほして窺ふことは最も適切であるとかんがへられます。仍つてその文を左に

鈔録いたしませう。

「本願名號正定業」は本願の行なり。「至心信樂願爲因」といふは彌陀如來廻向の眞實信心を阿耨菩提の因とすべしとなり。「成等覺證大涅槃」といふは、成等覺といふは正定聚のくらしへたまへり、これすなはち彌勒のくらしとひとしとなり。「證大涅槃」とまうすは必至滅度の願成就のゆへに、かならず大涅槃をさるとするべし。

この御釋文をうかゞうてもあきらかなることく、この一節は眞宗教義の本質を示されたもので、まさに御本典の綱格と一致するものであります。すなはち一宗の教義を表證せる御本典の綱格といへば教・行・信・證の四法である。そのうち教は能證であつて、その所證の法義にいたつては行・信・證であります。然り而して今この二行四句の一節段と對比するに「本願名號正定業」の一句は眞實行をあらはす「行卷」の精要であり、「至心信樂願爲因」の一句は眞實信をあらはす「信卷」の精要であり、最後に「成等覺證大涅槃、必至滅度願成就」の二句は眞

實證をあらはす「證卷」の精要であります。仍つて、この行・信・證の三法について衆生往生の因果をうかゞひ、如來救済の靈能を讃仰しなくてはなりません。まづ

### 眞實の不行

とは「本願の名號は正定業なり」の一句につきて居ります。この本願の名號に就て聖人が「銘文」に「選擇本願の行なり」と仰せられてあります。さてこの選擇本願とは大經の四十八願のうちの第十八願のことで「設ひわれ佛を得んに、十方の衆生、至心に信樂して我國に生れんと欲して、乃至十念せん、若し生れずば正覺を取らじ」といふ誓約をさすのであります。さてこの選擇本願といふ新しい名によつて淨土教の獨立を宣誓せられたのは法然上人であつて、その立教開宗の宣言書ともいふべきものには「選擇本願念佛集」と標示されました。諸佛の淨土には布施持戒忍辱精進禪定智慧といふ六度とか、菩提心とか、持經とか、起立塔像とか、飯食沙門とか、孝養父母とか、奉事師長とかいふ功德善根をもつてそれ／＼往生の

行業として規定されてある。けれども阿彌陀如來はこれらの諸行をえらびすて、專稱佛名の一行を選びとつて往生の正業とちかはせられたのが第十八願であります。かくのごとく一切の諸行を選び捨て、たゞひとへに乃至十念の一行を選びとつて、悪人救済の聖業を成就せられたことを第十八願のうへに發見して、これを選択本願とまうされたのであります。これも法然上人の善導大師からの傳せられたところであつて、またわが親鸞聖人に付屬せられたところでもあります。法然上人が親鸞聖人にその眞影を授與せらるゝや、その眞影の銘として、善導大師の「往生禮讚」にある本願とその成就の取意の文即ち「若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺、彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生」の眞文をしるして與へられたことをみても、相承の内意をうかゞふことができます。仍つて今親鸞聖人は「本願の名號」を御自釋あらせられて、「選擇本願の行」すなはち第十八願の乃至十念をあげられこれを「正定の業」であると示されたのであります。約言すれば、親鸞聖人の「本願名號正定業」とは法然上人の「往生之業念佛爲本」を相承せられたものであります。「歎異

鈔」に「親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし（往生之業念佛爲本の意譯）とよきひと（法然上人）の仰せをかふむりて信するほかに別の仔細なきなり」と仰せられたることを對照すればいよくこの邊の消息が明白であります。救済の本願を表現したまふ名號即ち南無阿彌陀佛の御名こそまさしくわれらを淨土に生るゝ身と定めたまふ業因である、南無阿彌陀佛の御名こそ如來の正覺の果名であつて、そのまゝ衆生の往生の行體である。われらはひとへにこの御名を念持することによつて、眞實の救済を體驗さしていたゞけるのであります。『行とまふすは本願の名號をひとこととなへて往生すとまふすこと』（「末燈鈔」）であるとしめし、「正定の因といふはかならず無上涅槃のさとりをひらくたねとまふすなり」（「銘文」）とのたまへる御釋を、うつしてもつてこの「本願名號正定業」の御親釋に擬すべきものでありませう。かくていよく「往生之業、念佛爲本」の師釋を傳統せられたこと、すなはち師資的傳の消息をたゞえなくてはなりません。しかも、親鸞聖人の教義綱格の全體を仔細に讃仰すれば純眞なる

### 傳統に即せる己證

の妙趣に驚嘆せずには居れませぬ。すなはち念佛爲本の奥意を開闡して信心正因の己證を上げさせられたことでもあります。法然上人はたゞ第十八願の上に該攝して法門を建設せられた（これを一願建立の法門といふ）けれども、親鸞聖人は第十七願と第十八願と第十一願と第十二願と第十三願とこの五願のうへに開闡し、教行信證の網格を建立せられました（これを五願開示の法門といふ）。従つて一願建立の法門にあつては選擇本願の乃至十念すなはち念佛をもつて正定業であると規定せられた。このときは信を行に攝して法門を建立せられてありますけれども、五願開示の法門にあつては選擇本願の行と信とを分相して、行は第十七願の諸佛稱名の願にもとめ、信を第十八の至心信樂の願にもとめられました。『行卷』にはこの「正信念佛偈」の前の文にこの消息をしめて「凡そ誓願について、眞實の行信あり、また方便の行信あり、その眞實の行の願は諸佛稱名の願なり、その眞實の信の願は至心信樂の願なり、これすなはち選擇本願の行信なりと仰せられました。かくて一願建立の法門は教行證の三法組織であつて、信は行のうちに該攝せられ、行證直接の教義であるけれども、五願建立の法門では行より信を別開せる教行信證の四法組織となり、信證直接の教義となります。従つて行證直接の教義では、「往生之業念佛爲本」の宣言となり、信證直接の教義では「涅槃眞因唯以信心」の教化となるのであります。法然上人より親鸞聖人への展開はこゝにあります。この展開によつて信の卓越性はいよく鮮明に表證せられ、行の先驗性はいよく深刻に開闡せらるゝのであります。然り而して、この教義の展開に伴うて「本願名號正定業」の一句も傳承の方面と發揮の方面とより解釋しなくてはなりません。一願建立の法門を傳承せられたる方面から釋すれば上にのべたごとく第十八願の稱名をさすものであるが、五願開示の法門を發揮せられたる方面から窺ふてみれば、そのまゝ第十七願の名號を意味することになります。第十七願とは「設ひ我、佛たるを得んに、十方の諸佛、悉く咨嗟して、我名を稱せずんば正覺をとらじ」とある、これすなはち一切群生を救ふ名號の威神力が諸佛によつて讚

嘆せられて法界に流布することをおちかひあらせられたもので、行ぜられ信ぜられる所行である。これに比對すれば第十八願の乃至十念とは衆生が信じて稱へる能行である。かくて分別すると、第十七願の我名はわれらの信の

### 對象たる法體の名號

であり、第十八願の乃至十念は信よりながれいつる處の機相の稱念であります。わかりやすくいへば、第十七願の我名は稱へらるゝもの（所行）であり、第十八願の稱念は稱へるもの（能行）であります。かゝる分別を試みてわが聖人は眞實の不行を第十七願に仰がれたのであります。「三經往生文類」にのたまはく「如來の往相廻向につきて眞實の行業あり、すなはち諸佛稱名の悲願（第十七願）にあらはれたり」ところした立場からすればこの「本願名號正定業」は存覺上人が、「十七願の意なり」（六要鈔）と標し、蓮如上人が本願名號正定業といふは第十七願のころなり、十方の諸佛にわが名をほめられんとちかひましゝて、すでにその

願成就したまへるすがたは、すなはち今の本願の名號の體なり」と釋せられたる如く第十七願の名號とうかゞはねばなりません。而してこの第十七願の名號を以て正定業とせられた用意を味はねばなりません。たゞ衆生の稱念についてのみ正定業を規定するとき、あるひはあやまつて能稱の機功をたので自力策勵の作善に陥らないでもない。否な法然聖人の門下にも定散の自心に迷うて金剛の眞心にくらき人々はいつしか自力稱念の因襲をかたちづくつてしまひました。こゝにおいてかわが聖人は師傳の他力念佛の奥義を示すべく、第十七願の我名を大行と指定せられ、自力稱念の我執を擱裂せられたのであります。南無阿彌陀佛となへる凡夫の機功によつて往生がさだまるのでない。凡夫の稱ふる稱名はそのまゝ稱へらるゝ名號のちからであつて、眞實の不行を機相の後驗的な稱念に固定さるべきでなく、先驗的な法體の名號に結歸する、かゝる溶融無碍なる生命の具象的實在こそ眞實の不行であると仰せられたのであります。



### 眞宗の大信

とは如何なるものなりや、「至心信樂願爲因」の一句こそよくこれを示すものであります。「尊號眞像銘文」にこの一句を釋して「至心信樂願爲因といふは、彌陀如來廻向の眞實信心を阿耨菩提の因とすべしとなり」とまうされてある。すなはち、信心正因の卓見を宣べたまふ眼晴であります。よつて、「信卷」には「涅槃の眞因は唯信心を以てす」とのたまひ、「一心は則ち清淨報土の眞因なり」とのたまふ、これ唯信獨達の御已證であります、蓮如上人は「聖人一流の御勸化のおもむきは信心をもて本とせられ候」とのべられたのはよく親鸞聖人の眞意を的示されたものであります。されば、われらはこの一句を玩味して唯信獨達の根本要義を頂戴せねばなりません。まづ「至心信樂の願」といふことについてのべませう。至心信樂の願とは第十八願のことである。第十八願とは「もしわれ佛たるを得んに、十方の衆生、至心に信樂して、我國に生れんと欲ふて、乃至十念せん、若し生れずば正覺をとらじ」といふ

おちかひである。もと、この第十八願について聖人は「信卷」に五つの名をあげさせられてあります。いはく「この心すなはちこれ念佛往生の願より出でたり、この大願を選擇本願となづく、また本願三心の願と名く、また至心信樂の願と名く、また往相信心の願と名くべきなり」と、このうち念佛往生の願とは善導大師の釋意をうけ、選擇本願とは法然上人から相承せられたものであります。觀念主義の聖者教より稱念主義の凡人道に展開したまひし善導及び法然の第十八願觀は乃至十念の他力稱念を高調せられたのである。親鸞聖人はこれを相承された事はいふまでもない、「本願名號正定業」の當面はたしかにこれを示されたのであります。聖人はこの稱念主義を傳統しつゝ、之れに即して更に信心主義を開展せられたところに、一段の徹底と發揮のあることは明白なことである。その信心主義の徹底によつて第十八願に新しく本願三心の願、至心信樂の願、往相信心の願といふ三名をまうけられたので、これは聖人の獨創の表現であります。この三名はとりもなほさず

### 「信」中心の本願觀

を表現するものであります。即ち、まづ「本願三心の願」とは本願の願文に至心信樂欲生我國といふ三心がちかつてあるから、その文面について廣讚せられたものである。終の往相信心の願とは三心あれどもそれは別個の體があるのでなくて、至心は體、信樂は相、欲生は義別であつて、この三心を綜合すれば往相廻向の一信心にきはまることを示して略讚せられたものである。而して「至心信樂の願」とは廣讚の名と略讚の名とを綜統して廣略を兼含せる願名である。いづれを以て本願を標示するも、もとより差支はない、けれども廣略兼含の願名はもつとも代表にふさはしいのと、もうひとつは第十九願第二十願に對比して第十八願の特質を示すに適切であるからである。即ち、第十九願は發願を特質とし、第二十願は廻向を特質とするに比してこの第十八願は信樂を特質とするからである。これを要するに本願は信樂をもつて往生の正因とちかはせられたことをあきらかにし、信樂の大信ひとつによつて名號の大

行を全領してすべてが何等のはからひもなく救はるゝ絶對救濟の旨趣を示したまふ懇念の結晶であります。然らば「至心信樂をもつて因となす」とのたまへば足る、何ぞ「至心信樂の願を因となす」とのたまふやといふに、これ願力廻向の信を正因とするむねをしめして、凡小自力の信にたよるのでないといふ他力義を開闡せられた深い思召のこもれるところであります。上にひいた「銘文」に「彌陀如來廻向の眞實信」とおほせられたことを、深く注意しなくてはなりません。いかに深いこゝろもちで、本願の女底に徹せられたかを感佩しなくてはなりません。紛々たる末學の詮議はしばらくさしおいて、こゝにわれは謙虚に親鸞聖人の體験をしのぶべく、たゞちに

### 親鸞聖人の本願釋

を三誦したい。聖人の本願釋はその至き選述の基調で、いづれの選述にもあらはれて居りますが、その全體がわかりやすくだゞけるのは「尊號眞像銘文」であります。

「設我得佛」といふはもしわれ佛になりたらんときといふ御ことなり。「十方衆生」といふは十方のよろづの衆生といふなり。「至心信樂」といふは、至心は眞實とまうすなり、眞實とまうすは如來の御ちかひの眞實なるを至心とまうすなり、煩惱具足の凡夫はもとより眞實の心なし清淨の心なし濁惡邪見のゆへなり。信樂といふは如來の本願眞實にましますをふたごゝろなくふかく信じてうたがはされば信樂とまふすなり、この至心信樂はすなはち十方衆生をしてわが眞實なる誓願を信樂すべしとすゝめたまへる御ちかひの至心信樂なり、凡夫自力のこゝろにはあらず、「欲生我國」といふは他力の信樂をもつて安樂淨土にむまれんとおもへとなり。「乃至十念」とまうすは如來のちかひの名號をとなへんことをすゝめたまふに遍數のさだまりなきほどをあらはし、時節をさだめざることを衆生にしらせんとおぼしめして、乃至のみことを十念のみなにそへてちかひたまへるなり。如來より御ちかひをたまはりぬるには尋常の時節をとりて、臨終の稱念をまつべからず。たゞ如來の至心信樂をふかくたのむべし、この眞實信心をえんとき攝取不捨の心光にいりぬれば正定聚のく

らゐにさだまるとみえたり。「若不生者不取正覺」といふは、若不生者はもしむまれずばといふことなり、不取正覺は佛にならじとちかひたまへる御のりなり。この御釋文を誦じきたるとき私はいつでも純な幼ごゝろをもたせられた聖人にして、はじめ、眞實の大悲の御親のめぐみを全領せられたことに感激するのであります。そして、はつきりと本願のこゝろをつきとめられたことをありがたく頂けるのであります。この本願釋は稱念主義から信心主義への純眞な徹底をしめすものである。十念の稱念を自力のほからひとし、若くは臨終正念の行儀となす不純な曲解者のあやまりを打破すべく乃至の二字によく着眼して、すべての律法的色調と定散的頑妄をはらひ、「たゞ如來の至心信樂をふかくたのむべし」と仰せられたことは深く注意しなくてはなりません。しかして、その至心信樂たるや全くめぐまるゝものなることを懇にといひ「この至心信樂はすなはち十方衆生をして、わが眞實なる誓願を信樂すべしとすゝめたまへる御ちかひの至心信樂なり、凡夫自力のこゝろにあらず」と道破したまふ、かくて他力廻向の信心によりて救はるゝ絶對救濟の無碍道を

この本願のうちに體得せられたのであります。よつて、この本願釋の終りに「この本願のやうは唯信鈔によく／＼みえたり、唯信といふは、すなはち、この眞實信樂をひとすぢにとるころをまうすなり」と仰せられた。これを要するに、聖人の本願釋は唯信獨達の眞實義を光闡せられたのであります。こゝにおいてか、本願他力こそわれらの救はるゝ唯一の白道である。聖人のつねにくりかへされた御持言に「彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそこばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。」(歎異鈔)これ本願を全領して救はれたまへる聖人の心境でありました。かくて、眞實の行信を獲得したとき、たちどころに正定聚の位に定る、これを「成等覺」と仰せられた。そして命終れば淨土に往生して無上の佛果を證る、これを「證大涅槃」と仰せられたのであります。かゝる

### 眞實の證果

を獲得するもまた願力の自然なるむねをあかして「必至滅度願成就」と仰せられた。「銘文」にのたまはく、「成等覺證大涅槃といふは、成等覺といふは正定聚のくらゐなり、このくらゐを龍樹菩薩は即時入必定とのたまへり、曇鸞和尚は入正定聚之數とをしへたまへり、これすなはち彌勒のくらゐにひとしとなり。證大涅槃とまふすは、必至滅度の願成就したまふゆゑに、かならず大涅槃をさとりとしるべし」と、聖人の體験はきはめて明白であります。地上に天國を建立せんとするは現實の大地をふみしめざる聖者の空像である。こゝにおいてか彼岸の淨土において理想を實現せんとする往生淨土の法門すなはち淨土教はたしかに人間の現實に立脚せる宗教たることはいふまでもない、そして、親鸞聖人はかゝる願生淨土の信奉者であらせられたこともまたいふまでもなく明白なことであります。しかも、こゝに注意すべきは在來の淨土教よりも徹底せられた御已證そのものである、その御已證にふたつの注意すべきものがあると窺ふ、即ちひとつには平生業成の現實的徹底である、ふたつには往生即成佛の究竟的徹底である。しかして「成等覺」は前者をしめし「證大涅槃」は後者をしめす、

僅かに一句なれども萬金の重きをなすものであります。換言すれば現當二世の徹底であつて「成等覺」は現實の信心における始益であり、「證大涅槃」は當來の報土における終益であります。この始終兩益の徹底によつて、はじめて救済の徹底と成就を體感するを得るのであります。よつて、以下、聖人の徹底味についていさゝか窺ふことにいたします。まづ

### 平生業成の徹底

にいつてうかゞふことにします。これまでの淨土教は自力策勵の行業によつて往生を決定せんとした。しかして自力の行業は死に至るまでも完全すべくもない。かれらは臨終の來迎をまつてやうやく救はれんとするに至るは當然であります。救ひに對する希願に生きんとするので、救ひを體感することはないことになります。ところが聖人は全く他力廻施の信心によつて往生は治定せしめたまふことにめざめられたのであります。往生の正因は全く信心をめぐまれて圓成するをもつて、一念のたちどころに攝取不捨の救ひを體感されました。かな

らず佛果にいたる正定聚の數に入り、ふたゝび迷界にかへらざる不退轉の位にさだまり、佛地を嗣ぐ等覺の彌勒とひとしき身となられた。「成等覺」とはすなはちこの風光をしめされたのであります。彌勒とは佛地を嗣ぐべき聖道の理想的人格である。しかも、若しそれ理想的人格に到達するともなほ佛果をひらくには永遠の距がある。しかるに、今や信心の行人はそのまゝ彌勒と同じき位に入り、また彌勒にさきだつて佛果にのぼるのであります。「眞に知んぬ、彌勒大士は等覺の金剛心を窮むるが故に、龍華三會の曉、當に無上覺位を極むべし、念佛の衆生は横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超證す、故に便同といふなり」(信卷)、これによつておもふ、聖者たちの理想してしかも實現されなかつたものが、凡人の現實にめぐまれたのであります。わが淨土眞宗は一切の宗教の求めんとするを與へられて實現したものである。かくて、法華經の便同彌勒の理想も華嚴經の諸佛同等の法悅も、この信の一念にめぐまれ廻施せられたとき、聖人の宗教は最高の權威を有しなくてはなりません。次に

### 往生即成佛の徹底

について親おぼふに、これまでの淨土教は往生と成佛とのあいだに距離をみとめて居りました。さながら、菩提ぼだい（成道の體證）と涅槃ねはん（入滅の悟證）とが分別されたごとく、久しく往生と成佛を分別してきたのであります。極樂へ往生してもそのまま成佛するのではない。なほ幾多の過程を経て成佛するとせられたのであります。ところが大乘教が菩提と涅槃とを一致したやうにわが聖人は往生と成佛とを一致せしめて、往生即成佛の證果を見出されました。往生すると同時に成佛することを示して今偈に「證大涅槃」とまうされたのであります。佛の全生命をいたゞいて成佛の原因が圓滿したる信心の行人は、もはや何等の成佛の資助をたくはふるを要しない。初生速極證大涅槃の妙境界に直達するのであります。かゝる、大涅槃をさとのるのも、全く願力の自然なるをあらはして「必至滅度の願成就したまへるなり」と讃仰せられたのであります。必至滅度の願とは第十一願で「たとひわれ佛を得んに國中の人

天、定聚に住し必ず滅度に至らずば正覺をとらじ」といふのであります。かくしてわれらの往生の因も果もすべてのものは願力の廻向であります。この願力の廻施にめざめてわが聖人は「雜行をすて、本願に歸す」といふ轉回をとげられたのであります。

### (第八) 大聖釋尊の本懐

#### 「慶所聞、嘆所獲」

これは「教行信證」の總序にのべられたところの文字で、親鸞聖人の根本的態度をしめすものであります。聖人は「説く人」でなくて「聞く人」でありました。「與ふる人」でなくて「獲る人」でありました。聞くところ獲るところの眞宗を慶嘆せられたのが聖人でありました。従つて、聖人ほど「教法」を敬重された方はありません。また「教主」を讃仰された方はありません。而して教主とは大聖釋尊であります。恭敬のこゝろをもつて、大聖釋尊のまへに跪つかれた親鸞聖人の内感をうちつけに表白せられたものは、この「正信念佛偈」に於ける「如來所以興出世、唯說彌陀本願海」といふ一行二句であります。語句は簡約であるけれども意味は深長であります。聖人はみづから、「尊號眞像銘文」のうちに、この一行二句のこゝ

ろを註釋あらせられて、次のごとくまうされました。

如來所以興出世といふは、諸佛のよ(世)にいでたまふゆへとまうすみことなり。

唯說彌陀本願海といふは、諸佛のよ(世)にいでたまふ御本懐は、ひとへに願海一乘の法を

とかんとなり。

しかれば、『大經』には「如來所以出興於世欲拯群萌惠以眞實之利」と、説きたまへり。この御釋によつて鮮明にうかゞはれるごとく、大聖釋尊、もつとくわしいへば一切の諸佛が、この人生にあらはれていろいろの教法をお説きなされるけれども、詮ずるところは、たゞひとつの普遍絶對の宗教的眞理、すなはち阿彌陀佛の本願の旨趣を説かんがためであらせられるといふ意であります。かゝる徹觀と洞察はもとより聖人の純な恭敬のこゝろによつて體得せられたものであります。しかも、みづから仰せられるごとく『大經』に於ける釋尊の自説、即ち「如來所以出興於世欲拯群萌惠以眞實之利」の文にもとづいて、洞觀せられたことも明白であります。この經文についても、聖人はみづから「一念多念證文」のうちに御釋あら

せられてありますから、左に抄録いたしておきませう。

大經には「如來所以興出於世欲拯群萌、惠以眞實之利」とのたまへり。

この文のころは、「如來」とまうすは、諸佛をまうすなり。「所以」はゆへといふことばなり。「興出於世」といふは、佛のよにいでたまふとまうすなり。「欲」はおぼしめすとまうすなり。「拯」はすくふといふ。「群萌」はよろづの衆生といふ。「惠」はめぐむとまうす。「眞實之利」とまうすは、彌陀の誓願をまうすなり。

しかれば諸佛のよにいでたまふゆへは、彌陀の願力をときて、よろづの衆生をめぐみすくはんとおぼしめすを本懐とせんとしたまふがゆへに、眞實之利とはまうすなり。これを諸佛出世の直説とまうすなり。

この御釋文を拜誦して、感戴することは、すべての佛たちのいろ／＼の聖典をとかれた御聲が、そのまゝ本願招喚の勅命になつてきこえたといふことは、親鸞聖人が「純眞に聞く人」であらせられたからのことでもあります。おほくの人々は眞實の御聲を、雜音に取まぎれて聞

損ふてしまふ、しかるに、あらゆる雜音をとりのけて「全一の眞實」として聞信せられたことはたうといことでもあります。「一切經は何を説けりや」そは「唯彌陀の本願を説けるのみ」と宣明せられたことは、ほんとうに鮮かな道破であります。

### 一 佛即一切佛

聖人の御釋をうかゞふて、なほ深く味ふべきことは、この『正信念佛偈』及びその典據たる『大經』にたゞ「如來」とあるを註釋して「銘文」には「諸佛」と仰せられてある。『略文類』になると「三世諸如來」と仰せられてあります。本來からいへば蓮如上人が『正信偈大意』にのべられたやうに「釋尊」と解釋するのが穩當のやうにおもはれます。しかるに、何故、聖人は念を入れて「諸佛」と解釋なさるのでありませうか。一見いぶかしく感じられないでもありません。しかしこの訝かしく感じられるところに深い思召がかくれて居るのであります。私はこゝに少くともふたつの思召がかくれて居るやうに窺つて居ります。そのひとつは釋尊はた



と偶然にこの世にあらはれて、自分の思ひつきから彌陀の本願をおとみなされたのでなくて、實は彌陀の願力に隨順せられた必然のあらはれであることを暗示されたのであります。彌陀の第十七願には「十方世界の無量諸佛」によつて彌陀の名號、即ち救済の御名がほめられ讃えらるゝことを御誓ひあらせられた。このお誓ひが成就して華光出佛が一切の世界に名號を宣説せらるゝことになりました。そして大聖釋尊はその華光出佛のうちの一佛にまします、十方世界の無量諸佛のなかの一佛にまします。従つて大聖釋尊は無量諸佛のなかの佛である一佛は一切佛のうちに統括せられます。一切佛の中に統括せられた一佛は、そのまゝ名號宣説、願海流布の先天的使命を負はせらるゝことを示すものであります。かくて、釋尊一佛を諸佛即ち一切佛の名によつて呼びたまふところに、十方無量の諸佛と共に、第十七願の誓約によつて現れたまふことを示されたのであります。ふたつには釋迦一佛に即して一切の三世諸佛の所證の平等なることを示されたのであります。宗教的眞理の普遍性をしめされたのであります。而してこれは一面において『法華經』の五佛開顯といふことに對比せしめたまふ點

もあつたと考へられます。即ち『法華經』にては三世の諸佛(三佛)と十方の諸佛(一佛)と釋迦牟尼佛(一佛)との開顯せられた眞實の妙法であるとするのである。これに對して『大經』もまた釋迦一佛の獨自性にとゞまらず、三世十方の普遍性を光闡せることを申されたのであります。かくて一佛即一切佛、一切佛即一佛の廣略相入の關係を示すべく「如來」の語を「諸佛」と解釋せられたのであります。かくて大聖釋尊と、三世十方の諸佛との關係は首肯されます。次いで釋迦一代の教説がたゞ彌陀の本願海をとかがためであると断定するには、釋迦と彌陀との關係をうかゞふに凡三種に分別されるかと思ひます。三種とは(1)二尊の對立と、(2)二尊の統攝と、(3)二尊の分化とであります。

## 二 二尊の對立

このときは、彌陀如來と大聖釋尊とを個々の對立として仰ぐのであります。したがつて二尊の所説も亦各別であります。即ち釋迦の教は聖道教であり、彌陀の教は淨土教である。

かくて、きつぱり二尊二教に分別さるゝ見方であります。この場合では淨土眞宗は彌陀の本願を仰信する宗教であつて、釋迦の教法を超越して居ります。だから、淨土眞宗は釋迦の説かれた宗教の外の宗教である。八万四千の法門以外の法門である。仍つて淨土眞宗は「門餘の大道」と稱せらるゝのであります。釋迦教を超越する眞宗はまた釋尊の教を背後にして彌陀一佛の仰せを信仰いたします。

釋迦如來かくれましたして、二千餘年になりたまふ正像の二時はおはりにき、如來の遺弟悲泣せよ。

釋迦の教法ましませど、修すべき有情のなきゆへに、さとりうるもの末法に、一人もあらじとゝきたまふ。

正像末の三時には、彌陀の本願ひろまれり、像季末法のこの世には、諸善龍宮にいらたまふ。(正像末淨土和讃)

凡そ一切經は大聖釋尊の自畫像ともまふすべきであります。即ち『華嚴經』は釋尊の内證

をあらはし『阿含經』は釋尊の言行をしめし、『法華經』はその久遠の面目を開顯し『涅槃經』はその法身の不滅を宣説して居ります。しかも、その聖道教を見すてねばならなくなつた眞宗は同時に釋尊教を超越して、正像末の三時を徹貫する彌陀の本願に歸入したのであります。かくて親鸞聖人は釋迦と彌陀との二尊教對立に廢立を斷行して、彌陀一佛を敬信せられたのであります。

### 二尊の統攝

それでは、親鸞聖人は全く釋尊を見すてゝかへりみられなかつたお方であるかといふに決してさうではない、否、釋迦の形骸を打破して、その生命にふれられたのであります。だから、釋尊を見すてたとか超越したとかいふよりも、實は釋尊の眞實の價値をたかめられたといふ方が適切であり、至當であります。すなはち釋尊を單なる釋尊として親せず、釋迦即彌陀、彌陀即釋迦と統攝して尊崇せられたのであります。

久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚をあはれみて、釋迦牟尼佛としめしてぞ、迦耶城には應現する(淨土和讃)

これすなはち釋迦は單なる釋迦でなく、彌陀如來の應現にまします。だから『大經』をお説きなされたときの釋迦は、五徳瑞現の威儀をあらはされました。五徳瑞現は彌陀の大寂定に住したまへる融本の表現であります。釋迦は彌陀と融會して『大經』をとかれたのであります。これ彌陀の直説と稱せらるゝ所以であります。このときは彌陀と釋迦とはひとつの救ひの御親であらせられます。慈悲の父母とまうすべきであります。

釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり。(高僧和讃)

釋迦彌陀の慈悲よりぞ、願作佛心は得しめたる、信心の智恵に入りてこそ、佛恩報する身とはなれ。(正像末和讃)

されば、親鸞聖人は釋尊の形骸を棄てられたと同時に、彌陀即釋迦として統融せられた釋

迦に至心の恭敬をさしげられたのであります。

## 二尊の分別

二尊に融け合ふて一つになれたとき、それにおのづから分別が行はれます。分別が行はれていよいよ統攝せられた救済の善巧方便をあさやかに窺知することが出来ます。このとき釋尊は「この土の教主」であり、彌陀は「かの土の教主」であらせられます。それゆへに彌陀は「欲生我國」と誓約せられ、釋迦は「願生彼國」と稱讃せられます。善導大師はこの消息に眼をつけなされて、二河白道の譬喩には彌陀を「西岸の招喚」とし、釋迦を「東岸の發遣」としめされました。このときの釋尊は全く彌陀の本願を説表するために出現あらせられた教主であります。華光出佛の宣傳者であります。だから、釋尊の一代の教法は數おほけれども、詮じつめてみれば、彌陀の本願をとくを本懐とせられるのであります。かくて『華嚴經』と『涅槃經』とを『大經』にすべくゝられ、『華嚴經』と『法華經』をも『大經』にすべくゝられました。す

べての教説は唯彌陀の本願海を宣説したまふものであります。

如來興世の本意には、本願眞實ひらきてぞ、難値難見とよきたまひ、猶靈瑞華としめしける。

恩徳廣大釋迦如來、韋提希夫人に勅してぞ、光臺現國のそのなかに、安樂世界をえらばしむ。(淨土和讃)

さて、いまこの『正信偈』はまさしく第三の場合即ち「二尊の分別」の立場から示されたのであります。

### 釋尊と念佛者

因に、釋尊とわれら念佛の行者との交際をうかゞふとき、わが親鸞聖人は少くともふたつの見方をもつて居られました。すなはち(一)往相位の等同と(二)還相位の表彰とであります。まづ往相位の等同といふのは、かの釋尊も彌陀の願海に歸して悟入せられたのであり、われ

ら念佛の行者もひとしく彌陀の本願に乗じて往生をとげさせていたゞくのであります。こゝに等同の法味があります。『大經』において釋尊がみづから念佛の行者をよんで「則我善親友」と仰せられたのはこの法味をいひあらはされたのであります。

他力の信心得る人を、うやまひおほきによろこば、すなはちわが親友ぞと、教主世尊はほめたまふ。(正像末和讃)

次に、還相位の表彰とは釋尊の生活がわれら念佛行者の還相の世界を表示された現實的典型とあふぐのであります。還相はわれらが淨土に往生しての上の靈動であります。しかも、これを現實のうへには釋尊のうへに回首して偲ぶことができます。

安養淨土にいたるひと、五濁惡世にかへりては、釋迦牟尼佛のごとくにて、利益衆生はきはもなし(淨土和讃)

つまり、聖人は釋尊を一面において彌陀と融合し、一面において行者と等同したまふ。これわれわれが救はれゆく世界における尊い契機的人格たるを示したまふに外ならないのであり

ます。かくて、われらは大聖釋尊とほして久遠の誓約をきき、大聖釋尊と共に永劫の生命を體得させていたゞけるのであります。大聖釋尊の出現は彌陀の本願海を説くを本懐としたまふことを讃仰するとき、釋迦一代の説法はすべてわれを導きたまふ發遣の御聲であることに氣づいて合掌せず居れないのであります。

### (第九) 仰いで信するのみ

#### 大聖一代の教法

はたゞ彌陀の本願海をときたまふ、これを洞觀して「如來所以興出世、唯說彌陀本願海」と讃歎せられました。これについては已に申したとほりである。しからばかゝる教法を領受するものはいかなる態度をとるべきでありませうか、これについては明快に「五濁惡時群生海、應信如來如實言」と仰せられました。この一行二句については聖人みづから註釋あらせられて「よろづの衆生、如來のみことをふかく信受すべしとなり」「尊號眞像銘文」とのべられてあります。すなはちわれらは唯仰いで信するのみであります。一行二句の眼睛は「應信」の二字である。この「應信」の二字は聖人の心境に内感せられた無上命令の發露の外ありませぬ。無上命令の發露であるだけそれだけ絶對威權を帯びて萬人の衷奥に迫るものがありま

す。蓋し、かゝる絶對信のうまれきたる所以のものは、「如來如實言」の徹判であるからであります。「如來如實言」とは釋迦如來の言説が眞實に契ふことを意味したので、これを具體的にいへば、釋迦如來のみことは彌陀如來の本願を唯一の内容とするからであります。かくて大聖によつて説きあらはさるゝ本願の絶對救済を仰ぐとき、われらはたゞ絶對隨順のひとつがあるだけであります。如實に説かれたる教法を如實に聞くとき、たゞ仰いで信するのみであります。眞實の世界において、説くも聞くもたゞ本願ひとつであります。かくて

### 「應信」は「如實の法」

にかなふ深信であるのみでなく、現實の機にかなふ深信であります。五濁惡世の群生たるわれらは本願を信じたてまつるほかに、救はるゝみちがないのであります。五濁惡世とは五濁によつて亂さるゝ悪い時機である。五濁とは『阿彌陀經』にとかれてあるごとく、劫濁(病氣や戰爭などいふ種々の災の滓濁が滿々てる時代をいふ)、見濁(邪見がさかんであつ

て思想の濁れること)、煩惱濁(貪慾、瞋恚、愚痴の三毒の煩惱がさかんに狂ふて人間の心を惱ますこと)、衆生濁(衆生が道を畏れず徳を修めず種々の俗見の上にあること)、命濁(煩惱さかんにして邪見つよく、時代が濁つて中天するものおほきこと)をいふので、つまり反宗教的な淺ましい時機をいつたのであります。故に「五濁惡時の群生」といへば救はれがたき惡人をさしたたのであります。しかるに彌陀如來の本願はかゝるあさましい惡人を救はんとおちかひあらせられたのであるから、われらはたゞこの本願を信することによつて救はるゝのであります。「本願海」と「群生海」とを對句にしたまふところに、かぎりなき極惡低下の現實の機と、かぎりなき大慈大悲の眞實の法との契同することを示されたものであらうとうかゞはれます。即ち「本願」と「群生」とを共にひとしく「海」によつて象徴されたのは無極の契同をしめされたものでありませう。こゝに

### 惡人正機の奥旨

を感載しなくてはなりません。いかなる行業によつても救はれがたき機の眞實にふれた深信は、そのまゝ救はれがたきものをこそ救ひたまふ法の眞實を信するのであります。かくて悪人正機の法悦は絶対救済の體認によつてあらはるゝ感激であります。「善人なをもて往生を乞ひはんや悪人をや」(『歎異鈔』)と端的にうち出されたのはこれです。これ聖人の深刻なる體験であつて宗教の眞實の境地にふれたものであります。かゝる聖人の體験は『大經』の本願文に對する聖人の釋義をうかがふても、明白にいたゞけます。すなはち、本願文には「十方衆生」とよびかけられ、その成就文には「諸有衆生」とおほせられてあります。十方といふも、諸有といふも、あらゆる衆生を對象とせられた救済の普遍性を示されたものであります。それは誰れしも氣のつくところでもあります。しかるに聖人はこゝに救済の普遍性を體達なさるだけでなく、そのうへにさらに救済の深刻味を色讀なされて、悪人正機の願意を闡顯せられてあります。すなはち「淨土和讃」にこの本願文をうけて「十方諸有の衆生」とのべ、これを御草稿本の御左訓には「しよはは二十五のしゆじよといふ、われらしゆじよは、

廿五にすぎてむまるといふこゝろなり」とのべられてあります。これすなはち「諸有」を「もろもろの有」とよみ、もろもろの有すなはち「二十五有」と解せられたのである。そして二十五有とは四惡趣(地獄・餓鬼・畜生・修羅)、四州(東弗婆提州・南閻浮州・西衛耶尼州・北鬱單越州)、六欲天(四王天・舍利天・夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天)、梵王天・四禪天・初禪天・二禪天・三禪天・四禪天・四空處天(空處天・識處天・無所有天・非想非々想天)、無想天・那含天を總稱したので、つまり迷界の總稱であります。だから「諸有衆生」を「二十五有の衆生」と解釋せられたことは「さまよへる人々」といふことに外なりません。さまよへる悪人こそ本願の正しき對機であると體認せられた聖人の内感をあらはすものであります。次に本願には「唯除五逆誹謗正法」とあります。これは表面からかゞへば五逆の罪人と誹法の悪人とを除くといふことは本願の對機の制限あることゝも解釋される、若し對機を制限すれば絶対救済でなくて相對救済でなくてはなりません。こゝにおいてか先賢いろ／＼に心をくだいて會釋につとめて居られます。しかるにわが聖人はきはめて大膽にこの矛盾を解剖していよ／＼

絶對救済の奥旨を開闡せられました、すなはち『尊號眞像銘文』にこの本願文の『唯除五逆誹謗正法』を註釋せられました、「このふたつのつみ(五逆と誹謗)のおもきことをしめして十方一切の衆生みなもれず往生すべしとせむとなり」と仰せられました。かくて、唯除五逆誹謗正法は救済の制限をしめすものでなくて、救済の徹底をしめしたまふものである。罪の意識をふかめていよいよ本願の正機を逆顯したまふのであります。これまた、悪人正機の願意をしめされることにもなるのであります。これ、「十方衆生」の本願を「親鸞一人のためなりけり」と頂戴せられ、その「親鸞」は「そくばくの業をもちける身」である。「いづれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と覺知せられたその「一人」である。かくて悪人正機の奥旨は、聖人がもつとも深刻なる罪の意識を抱いて、たゞちに、もつとも徹底せる本願の救ひを領會せられた體認でありました。

## （第十） 一念喜愛の心

信は往生の道である

信することのみが眞實に救はれゆくみちである。この妙趣を讃嘆あらせられて「能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃」と仰せられました。この一行二句を聖人はみづから『尊號眞像銘文』のうちに註釋あらせられて「能發一念喜愛心といふは、一念慶喜の眞實信よく發すれば、かならず本願の實報土にむまるとしるべし。不斷煩惱得涅槃といふは、煩惱具足せるわれら、無上大涅槃にいたるなりとしるべし」とのべられてあります。すなはち信心をいたゞけばあさましい煩惱具足のわれら凡夫も、このまゝ本願によつて成就せられた眞實報土に生れて、眞實の證果をひらかせていたゞけるといふ體感の表示であります。換言すれば「能發一念喜愛心」とはわれらが淨土に往生する正因をのべられ、「不斷煩惱得涅槃」とはわれらが往生し



て開顯する證果をのべられたのであります。こゝに純眞なる救ひの道すなはち一乘佛敎の最高意義が象徴されてゐるのであります。

### 一念喜愛の心

とは、聖人の御自釋のごとく「眞實信」である「まことの信心」である、かくの如くまことの信心を「一念喜愛の心」と表示されたのは『無量壽如來會』の第十八願成就文の「能く一念の淨信を發して歡喜愛樂す」と及びその彌勒付屬文に「能く一念喜愛の心を生ず」とあるに、據られたものである。眞實敎の中心眼目はいふまでもなく本願成就文と付屬文とである。この眞實敎の中心の表現を端的にうち出してしめされたので、聖人の用意ふかく味はふべきものがあります。しからは、何故に「まことの信心」を「一念喜愛の心」と表現されたのであるか、また「一念喜愛の心」といふ表現が、いかに「まことの信心」を附顯してゐるのであるか、これについてすこしばかり叙することゝしやう。まづ、一念といふことは信の一念と解

するときに、行の一念と味はふときとあるが、今は信の一念である。信心を一念といふのである。そして、信心を一念といふにも、聖人のうへにはくわしく云へばふたとほりの意味があります。ひとつには時尅についての釋である。『敎行信證』の「信卷」に「一念とはこれ信樂開發の時尅の極促を顯はし、廣大難思の慶心を彰すなり」とのたまひ、『一念多念文意』に「一念といふは、信心をうるときの、きはまりをあらはすことばなり」とおほせられたのがこれです。この釋意では一念とは「ひとおもひの信心」といふことであります。ふたつには信相についての釋である。おなじく「信卷」に「一念といふは信心二心なきが故に一念といふ、これを一心となづく、一心は即ち清淨報土の眞因なり」とあるのがこれです。この釋意によれば一念とは「ふたところ即ち疑のない信心」といふことになります。凡小のはからひをさしはさむ餘地はない。あらゆる自力のはからひを超越して如來に直接し、如來心を全領したのが信心であることを窺はねばなりません。如來心をそのまゝ全領した一念の信心こそ眞宗敎の本質であります。こゝに

### 救はれるものゝ悦び

があるよ、これを「喜愛の心」とおほせられたのであります。信心とは干からびた概念ではない、固定した獨断でもない。況んや生命の束縛ではない、生命のながれのしらべ、救はれることの法樂と感謝、こうした生命の具體的表現として「喜愛の心」はふさはしいものである。このほんとうに救はれるものゝよろこび、これをもつとわかりやすく云へばこのまゝ救はれて證ることのよろこびであります。救はれることの内容は、つみふかきわれらがこの現身のうへでは如來の御光におさめとられて正定不退の聚に入っている現實の安住と、やがて淨土に召されて如來とひとつになりきる永遠の滅度とであります。したがつて救はれるよろこびは、しばらく分別すれば、現實の安住と永遠の滅度とについてそゝがれてあります。こゝに聖人は信心のよろこびを、しばらく慶喜と歡喜とにふりわけて釋せられました。すなはち「一念多念文意」には「歡喜は、うべきことを得てむすと、さきだちてかねてよろこぶこゝろ

なり、慶とはうべきことを得て、のちによろこぶこゝろなり」とあります。歡喜は當來の佛果に至るよろこびであり慶喜は現生の正定聚に住するよろこびであります。もとより、ふたつはひとつの救ひの内容であるが、地上に天國を夢想せず、現身の成佛に矜持せず、最後まで大地の現身は罪ふかきものであるといふ現實の反省のうへに、あくまで彼岸の淨土を憶がれたれた聖人は、かくの如く分別してしめされたのであります。攝取されたものとして如來に合掌し、召されてゆくものとして淨土を願生するものゝうちにこそ、眞に如來との親しい法喜が體驗せらるゝのであります。次に

### 煩惱を斷ぜずして

涅槃を得とは、上にのべた一念喜愛の信心によりて、淨土に往生して得るところの證果をのべたものであります。而してこの表證は曇鸞大師の『往生論註』によられたものである。天親菩薩の淨土論に淨土の莊嚴を讚嘆したまふや、その清淨功德を讚嘆して「彼の世界の相を觀

するに、三界の道に勝過せり」と仰せられた。これを『往生論註』に註釋して、

これ云何ぞ不思議なるや、凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの淨土に生るゝことを得れば、三界の繫業畢竟して牽かず、すなはちこれ煩惱を斷ぜずして涅槃分を得るなり、いづくんぞ思議すべけんや

と仰せられた。聖人は今この釋文をうけて一乘の妙果を表證されたのであります。本願の眞實報土に往生すれば、煩惱具足のわれらも無上涅槃をさとることを示されたので、これすなはち彼岸の淨土における妙風光をたゞえられたのであります。しかも、こゝに現實の信心の徳益をも味はふことができないではありません。こゝにおいてか、蓮如上人は現益として註釋せられました。すなはち『正信偈大意』のうちに解して、

不斷煩惱得涅槃といふは、不思議の願力なるがゆゑに、わが身には煩惱を斷ぜざれども、佛のかたよりは、つゝに涅槃にいたる分にさだめますなり

と仰せられた。これすなはち、現生において「つゝに涅槃にいたるべき分」即ち正定聚の位

にさだまることをのべられたのであります。おもふに、これは彼岸の妙果をしめしたものであることはいふまでもないけれども、現實の信益もおのづから具有されてあることは明白であります。さて煩惱をいかに解決するかは、佛敎の根本の問題である。これについて煩惱を斷じて涅槃をひらくことが、因果必然の道理として、佛敎を通じて一貫するところの主潮である。これに比べると不斷煩惱得涅槃といふこと、煩惱を斷ぜずして涅槃を得ることは、いかにも矛盾したやうであるが、しかし煩惱を斷じないといふことは凡夫の立場から云つたことで、如來の立場から云へばすべての煩惱を斷じたまふのであります。つまり他力斷と自力不斷との分際でうかゞふべきであります。他力で煩惱を斷じたまふによつて、自力では煩惱を斷ぜずして救はるゝのであります。ゆゑに

### 不斷は他力を示顯

するのであります。「信卷」に

往相の一心を發起するがゆゑに、生として當に受くべき生なく、趣として更に到るべき趣なし、已に六趣四生の因亡じ果滅す。故に頓に三有生を斷絶す、故に斷といふなりとあるは、横超の他力による斷德をしめされたものであります。かくて、われら凡夫は煩惱を抱きつゝそのまゝ救はれてゆくのであります。あるとき蓮如上人が法敬坊順誓にまうされたことがあります。

一念のところにて、罪みな消えてとあるは、一念の信力にて往生さだまるときは、罪はさはりともならず、されば無き分なり、命の娑婆にあらんかぎり、罪はつきざるなり。こゝに深い人生に對する理解と、つよき信德に對する讚仰とがあります。罪人がこのまゝ救はるゝ本願力の内容にはあらゆる罪を減斷し去る威力がみちみちて居るのであります。煩惱をとりのけてから佛に趣向するのではない。煩惱の具足せるまゝ佛に救済せらるゝのであります。故に不斷煩惱のまゝ救はるゝ法悦の背面には法藏菩薩の恩德を味はなくてはならぬ。この儘救はるゝまでに充たされたる眞實の境地が深い愛と知によつて建立せられたことを

感佩しなくてはなりません。次に

### 煩惱と涅槃との對立

はいくらか妥當をかいてゐないかとも議せられる、煩惱は惑である、煩惱の惑に對立するものは菩提の智でなくてはならない。また涅槃の悟界に對立するときは生死の迷界でなくてはならないのであります。けれども今はこの二個の對立を影略互顯して示されたもので、こゝに往生即成佛の趣旨があらはされて居ります。

## (第十二) 平等一味の信界

### 宗教は純一の境地

である。あらゆる雑多を純一に融化してゆくところに、宗教の妙趣が味はされるのである。  
 「凡聖逆誘齊廻入、如衆水入海一味」凡聖逆誘ひとしく廻入すれば、衆水の海に入りて一味なるが如しとは、此妙趣をのべられたのであります。親鸞聖人は「尊號眞像銘文」にみづからこの一行二句を註釋せられて

凡聖逆誘齊廻入といふは、小聖・凡夫・五逆・謗法・無戒・闍提、みな廻心して、眞實信心海に歸入しぬれば、衆水海にいりてひとつあちはひとなるがごとしとなり、これを如衆水入海一味といふなり

とのべられてあります。凡夫も聖者も、五逆の罪人も謗法のいたづらものも、つまり、どん

な人々であらうとも、等しく心をひるがへして如來の本願に歸入すれば、さながらもろくの川水が、海にながれ込むと、一樣に鹹い味となるやうに、みんな平等一味の境地に安住させていたゞけるのであるといふ意味であります。

### 法然上人も耳四郎も

おなじくめぐまれて救はれる世界はたゞひとつ、それは宗教の世界たゞひとつであります。善人と悪人とがわかれた、智者と愚者とがわかれるのは、「義」の世界の常態であります。善人も悪人も、智者も愚者も、すべて容れられるのは「救」の世界の特別な味はひであります。この救の世界は本願他力によりて完全されるのであります。「彌陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」とはこの旨趣にほかなりませぬ。相対的な善悪を超えた絶対の本願によつてのみ、すべてが平等一味の境地に救はれるのであります。この意味において品次と階程とをわかつお淨土は宗教の理想としてはいまだ徹底しないものであります。こうした平等一味の境

地を體得されることは同一の念佛によつてすべられるからであります。同一の信心にもとづくからのことでもあります。そしてこの信念が同一であるといふことは、同一の如來からめぐまれた信心であるからです。凡夫の各自の思想や行爲からうまれて出る信心はその人格の差異によつて殊別の生ずるのは當然のことでもあります。これに關しては曾て親鸞聖人が

### 吉水の御草庵にて

その同侶の方々と、論ぜられたことが傳へられてあります。「信心一異の諍論」と稱せられるものであります。この「信心一異の諍論」は「歎異鈔」をはじめとして「御傳鈔」や「淨土法門見聞鈔」のうちにも傳へられてあります。今は「歎異鈔」の總結の一節によつて窺ふと次のこととであります。それはまだ御師匠の法然上人が御在世の頃で、吉水の教團における日の出來ごとであります。澤山のお弟子たちがゐらせられたけれども、そのなかで同じ信心をいたゞいてゐられた人は少かつたものとみえて、わが親鸞聖人と他のお弟子たちとのあひ

だに信心のことについて圖らず争論がもちあがつたことがありました。その次第はこうである。その頃、善信と名のつてゐられましたわが親鸞聖人が「この善信も、法然上人の御信心も同一である」と仰しやつたのが問題となつたのです。勢觀房とか念佛房とかいふお弟子たちはこれをきゝとがめて「どうして御師匠の法然上人の御信心と、弟子の身分たる善信房の信心とが同一であるわけがあらう」と詰責した「若し、御師匠の法然上人の智慧ふかく才能の勝れてゐらせられるのに、このわたくしが同一であるとまうすのであればこそ、間違つたこととあります。けれども如來の他力を仰ぎたてまつる信心のひとつにおいては、すこしも異があらう筈がない。全く同一である」とわが聖人は辨明なさつたけれども、それでも他のお弟子たちは首肯しませぬ「なんでそんな筈があらう」と非難いたしました。その結句とどう法然上人の前に出て、双方の申條の是非をきめていたゞかうといふことになりまして一伍一什をまうしあげられたところ、法然上人の仰られるやうには「源空の信心も如來からたまはつた信心である。善信房の信心も阿彌陀如來からいたゞかれた信心である、してみれ

ば全く同一である。従つてこの源空の信心と異つた信心をもつて居られる人々は、源空のま  
いらせていたゞくお浄土へはよもやまいられますまい」と仰せられました。これが信心一異  
の淨論とまうすのであります。これは味ふべきことであつて、法然上人のお言葉はよく信心  
の同一なるべき理由を示されてあります。

かくて同一の生命を廻施せられて、同一の信心に住せるものは同一の生命道を辿るのであ  
ります。「同一に念佛して別の道なきゆゑに、遠く通するに四海のうちみな兄弟なり」といふ  
『論註』の釋は、よく

### 平等一味の僧伽

の風情を示すものであります。これを『安心決定鈔』には、「さきに往生するひと他力の願  
行に歸して往生し、後に往生するひと正覺の一念に歸して往生す、心蓮華のうちにいる  
故に四海皆兄弟なりといふなり」と仰せられた。兄弟の親愛は慈親をひとつにする人々のみ

の感するよろこびであります。蓮如上人が法敬とわれとは兄弟であると仰せられ、親鸞聖  
人がすべての念佛者を御同朋とよばれたのはこの情味であります。かくて同一の生命道をた  
どるものは、やがて同一の眞實報土に往生して、同一の證果をひらき、現當に徹して一味の  
風光に逍遙するのであります。

### (第十二) 慈光に護られて

名號は慈父である

光明は慈母であるとは、親鸞聖人のめざめたる内感であり、法悦であります。救はるゝといふことは、慈父の御名號を生命とし、慈母の光明に攝護せらるゝことであります。つまり、御名をめぐまれ、御光にまもられて生かしていただくところに救はるゝものゝ安らかさところろ強さがあるのであります。私に自ら救ふ力があつて生きてゐるのでない、あさましい私をも捨てたまはぬ深いお慈悲があるによつて、まちがひなく救はるゝのであります。この旨趣を讀んで「攝取心光常照護、已能雖破無明闇、貪愛瞋憎之雲霧、常覆眞實信心天、譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇」と仰せられたのであります。この三行六句について『尊號眞傳銘文』に、次の如く註釋せられてあります。

「攝取心光常照護」といふは、無碍光佛の心光つねにてらしまもりたまふゆへに、無明のやみはれ、生死のながき夜、すでにあかつきになりぬとしるべし、「已能雖破無明闇」といふはこのころなり、信心をうればあかつきになりぬとしるべし、「貪愛瞋憎之雲霧、常覆眞實信心天」といふは、われらが貪愛瞋憎をくも、きりにたとへたり、貪愛のくも、瞋憎のきり、つねに、信心の天をおほへるなりとしるべし。「譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇」といふは、日月のくもきりにおほはるれども、やみはれて、くもきりのした、あかきごとく、貪愛瞋憎のくもきりに信心はおほはるれども、往生にさはりあるべからずとなり。

この註釋を拜誦すれば、聖人のおこゝろが誰れにも、はつきりただけです。つまり信心の生活はわれらがどんなにあさましいころに取亂れても、慈光のおまもりにはかりがないことを示されたものであります。ことに貪愛と瞋憎になやみつづけてゐる大地の凡人が、ありのまゝに救はるる境地が存するのであります。「攝取の心光常に照護したまふ」の一句はまことに力つよい體驗であります。ふかいふかい聖愛のうちに自己を見出したものゝ神秘的な



おどろきであります。

### 攝取の心光とは何ぞや

一言にして掩へば、如來のお慈悲であります。聖尊の重愛であります。さてこの「攝取の心光」といふのは「遍照の色光」と對比した表詮であります。すなはち、如來の人格的感化はあらゆる人々に及ぶものであるから、これ遍照の光明といつたのであります。慈悲の佛心にめざめた念佛行者はそこに攝めとつてすてたまはぬ御光を仰ぐのであるから、これを攝取の光明といつたのであります。そこで「遍照の色光」はわれらを哺んでくださる御光であつて、この御光に哺まれ育てられて、信の一念がきざしたときは「攝取の心光」として仰がれる次第であります。つまり、「遍照の色光」が徹底したところが「攝取の心光」であります。この「攝取の心光」によつて「信心の智慧」が開發せられ、「信心の智慧」によつて「攝取の心光」が讃仰せられます。「おさめとつてすてたまはぬ」徹底した御光は常にわれを照護したまふ、

われらは常に慈光のうちに生かされて、われらは愛せられて生きるものである。護られて生かされるものであります。ある妙好人に向つて、「おまへさん、果してまちがひなくまいらせていたゞけるかの」と皮肉に詰問したものがあつた。すると妙好人は「わしや知らぬ」とはねつけた。問者は意外である。「そんなことでよく落ついて念佛して居れるな」と訝つた。妙好人は言下に答へた「如來さまに問ふてくれ」と。實に意味ふかい答である。われらの救ひの資格はわれらのうちに見出されるのでない、たゞ如來の慈悲にひそんでゐる。絶對愛の必然によつて約束せられてゆくのである。これを仰いだ信心のみこの佛力の攝受を内感するのであります。「攝取の心光常に照護したまふ」慈光は法界にみなぎつてゐる、慈光は不斷にわれらにそそがれてゐる。とりわけて

### 「常照護」の一句

は意味ふかくいたゞかれます。つまり不斷の愛護をしめすものであります。「護」の一字は、

しつくり、われらを救ひたまふ人格的な象を示して居ります。「二卷鈔」にのたはく、「護の言は阿彌陀佛の果成の正意をあらはすなり、亦た攝取不捨の貌を形はすなり、すなはちこれ現生護念なり」と、聖人もこの「護」の一字をみつめてそこに強いそしてあたゝかい人格的道交を内感せられたことが、はつきりうかゞはれます。若草をてらす春光のおもむきよりも、嬰兒を抱く母の姿が聯想されます、そしてかゝる「照護」はたゞわれ佛を念するときわれ佛を念ふときだけにあらはるゝ感應でなくて、いつでもまもりたまふのである、不斷にそゝがるゝ慈愛であります、「常」の一句にふかいふかい落つきを感じるのであります、つまり「常照護」は不斷の愛を内感したる聖人の讃嘆でありました、かくて如來は常にわれをまもりたまふ、しかるにわれは「常」に如來を仰いでくらしめてゐるであらうか、どうか、ひとたびこれを内省したとき嚴肅な感傷に襲はれずに居れないのであります、聖人はこの内省を告白して、「已に能く無明の暗を破すといへども、貪愛瞋憎の雲霧常に眞實信心の天に覆へり」と仰せられました、御光にふれて無明長夜の暗は破れた、新生の「あかつき」はめぐまれた、生命

の黎明をあふぐ身となつた、しかも、大地の凡人は現身にさとりをひらくことはできない、貪愛の雲、瞋憎の霧、つまり三毒の煩惱は常に眞實信心の天を掩ふてゐる、「攝取心光常照護」と「常復眞實信心天」とを對比してふかく内省しなくてはならぬ。

### 「常照護」と「常覆天」

との對句こそ、嚴肅な聖人の内省をしめしたまふものであります。慈光は「常」にわれを照護したまふけれども、わが貪愛の雲霧はつねに信心を覆ふ、如來つねにわれをまもりたまふ、しかも、われつねに如來をわする、このかなしい分裂をいかにして統べらるか、聖人はこの内省の惱みの底をうちやぶつて、そこにいよゝ絶對の救済を體驗せられました、「譬へば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下明かにして闇なきが如し」「日月のくもきりにおほはるれども、やみはれてくもきりのした、あかきがごとく、貪愛瞋憎のくもきりに信心はおほはるれども、往生にさはりあるべからず」、われ如來をわするゝも如來われをすてたまはぬ

ところに絶対救済の深刻な意味をいたゞかねばならぬ。こゝに相對の染淨を越えてすべてを  
 すぐひたまふ絶対の佛心によつて最後の救ひが成就せられたのであります、よろこばなくつ  
 てもよいのでない、なんぼ貪瞋があつてもいゝのでない、貪瞋は惱みである、欺かれざる惱  
 みである、これを超越せずに居れないところに眞摯な生がある、しかも超越せんとして超越  
 せられざるところに相對是認の價値の世界が破綻してしまふ、たゞ絶対の佛力のみこれを救  
 ひたまふ、御光は風が吹いたら消えてしまふ燭光のやうなものでなくて、雲霧に掩はれても  
 かきけされぬ日光のやうなものであらねばならぬ、つまり、絶対救済のおんはからひ、ひと  
 つあるのみであります。

### 第十三 横超の直道

#### 相對是認の世界

には最後まで救ひは見出されませぬ。そこには相對善と相對惡との對立が存するだけであつ  
 て純全な統一は存在しない。宗教はこの相對の善惡を超越して、しかもその善惡を攝取する絶  
 對の統一によつて成立つ救済を本質とするのであります。これ親鸞聖人が自力のはからひ  
 を一蹴して他力の本願に歸命せられた所以であります。これ「他力には義なきをもて義とす」  
 る絶対依憑の境地に眞實の宗教を見出された所以でありました。かくて、惡人が善人となつ  
 てはじめて救ひを求めるのでなく、惡人がそのまゝ救はれる不可稱不可說不可思議の境地が  
 あらはるのであります。これをわが聖人は「獲信見敬大慶喜、即横超截五惡趣」と讚嘆  
 せられたのであります。聖人はみづからこの一行二句を『尊號眞像銘文』のうちに註釋せら

れて次のごとくのべられました。

「獲信見敬大慶喜」といふは、この信心をえて、おほきによろこび、うやまふひとといふなり。「即横超截五惡趣」といふは、信心をうれば、すなはち、横に五惡趣をきるなりとしるべしとなり。横超といふは、横は如來の願力をまふすなり。超は生死の大海をやすくこえて、無上大涅槃のみやこにいるなりと、信心を淨土宗の正意とするなり。このころをえつれば、他力は義なきを義とすとなり。義といふは行者のはからふころなり。このゆへに自力といふなり。よくよくこころうべし。

信心をめぐまれて生きるものゝ内の充實とその生命の非常跳躍とが、豊かに、そしていきいきと示されてあります。而して、この「横に五惡趣を超えて」ゆく横超の跳躍こそ、宗教そのものゝ本質であり、この宗教の本質を純全にうち出したものが、淨土眞宗であることを尅明された御釋であります。わが聖人はこの「横超」の二字に深い意味を見出し、これを中核として

### 卓拔せる教相判釋

を組織せられました。即ち『愚禿鈔』には次のごとく記されてあります。

聖道淨土の教について二教あり

一には大乘教 二には小乗教

大乘教について二教あり

一には頓教 二には漸教

頓教についてまた二教二超あり

二教とは

一には難行、聖道の實教所謂佛心、眞言、法華、華嚴等の教なり

二には易行、淨土本願眞實の教大無量壽經等なり

二超とは

一には堅超 卽身是佛卽身成佛等の證果なり  
 二には横超 選擇本願眞實報土卽得往生なり  
 漸教についてまた二教二出あり

二教とは

一には難行道 聖道權教法相等 歷劫修行之教なり  
 二には易行道 淨土要門無量壽佛觀經の意定散三福九品の教なり

二出とは

一には堅出 聖道歷劫修行之證なり  
 二には横出 淨土胎宮邊地懈慢の往生なり

古來これを二雙四重の教判と申して居ります。今これを、更にわかりやすく圖科として示せば、次のごとくであります。



これは即ち一代佛敎を大判して小乘大乘とわかち、そのうち大乘をば頓敎と漸敎とに分つてみたのである。そして難易二道の鴻判、聖淨二門の教判をうけて、しかもこれを頓漸にて分判し、頓敎に堅超と横超とをわかち、漸敎に堅出と横出とをわかつたのである。かくて淨土眞宗の一代佛敎に於ける地位をあかし、淨土眞宗こそ阿彌陀如來の選擇本願を宗とする横超の直道たることを釋成せられたのであります。いふところの頓敎とは證果をひらくことの遲速によつて示したのである。そしてこれを横と堅、超と出とによつて對配せられたのである。さてこの

### 横と堅、超と出

との對配は何を意味するのであらうか。これについて、聖人は『尊號眞像銘文』に次のごとく  
のべられてあります。

「横」はよこさまといふ。よこさまといふは、如來の願力を信するがゆえに、行者のはから  
ひにあらす、五惡趣を自然にたちすて、四生をはなるゝを横といふ。他力をまふすなり。  
これを横超といふなり。横は豎に對することばなり。「超」は迂に對することばなり。豎と  
迂とは自力聖道のこゝろなり。横と超とはすなはち他力眞宗の本意なり。

これを上にひいた横超釋と参照すれば、さらに意味が鮮明となりませう。このうち「迂」と  
は出のことです。そこで、右の釋を要約すると、横は豎に對することばであり、超は出に對  
することばであります。そこで、「横」は他力を意味するもの、「豎」は自力を意味するもので  
ある。また「超」は頓證、「出」は漸證のことである。よつて横と超は宗教として純粹なもので  
ある。そして、わが淨土眞宗はこの横超の直道であります。この横超はまさに相對是認を  
えた絶對救濟の意義をしめし、自力修成の迂路をすて、他力廻施の信の直道を開顯するも

のである。更にこれを換言すれば、如來と凡夫との關係を分別したもので、如來と凡夫とが  
何等かのかたちで隔歴してゐるかぎり、宗教として徹底しきらない點がある。この如來と凡  
夫とのあひだに何等の隔歴をもさしはさまぬ端的な直接した道交をあらはしたところに宗教  
の純化があります。そして横超とは如來の願力によりて、すべての隔歴が泯亡して、善人も  
惡人もそのまゝ救はれてゆくことを示されたのであります。」

### (第十四) 稱讚せらるゝ生活

#### 馬に踏まれて朽ちる雑草

も、若しそこに一輪の花がひらいたなら、ソロモンの榮華にも比ぶべき美しい生けるものとして愛でられます。われらは何人にも認めらるゝことなしに、ほろびてゆかねばならぬあはれな凡夫であるけれども、そこに眞實の生命としての信心がめぐまれたとき、もろもろの佛たちによつて稱讚せらるゝのであります、聖人はこの榮光を感佩して「一切善惡凡夫人、聞信如來弘誓願、佛言廣大勝解者、是人名芬陀利華」と仰せられました、いはくすべての人々それは善き人々も悪しき人々も、たゞこの如來の誓願の旨趣を聞いて信すれば、すべての佛達からは稱讚せらるゝ高い存在となる、釋尊は大經の會座では廣大勝解者としてほめたまひ觀經の會座では「芬陀利華」即ち白蓮のやうな人であるとほめさせられたと仰せられたのであ

ります。美しい像を刻みあげた藝術家が自分の刻んだことを忘れて、像の姿に見惚れてゐるうちに、その像が生きて動き出してくるやうな驚きを有する釋尊の稱讚であります。この釋尊に稱讚せらるゝ念佛の生活者はこゝにふかく味ふべきものがあります。まづ廣大勝解の者の意味は解とは了解即ち知慧のことである、その知慧の廣大にして勝れたることを廣大勝解と申されたのであります、信心の行者は地上に横はる最大の謎を解くことのできる眞實の智慧をめぐまれた身の上であります、地上に横はる最大の謎は出離解脱の問題であり、生死の一大事であります、戒定慧の三學の器にあらざるわれらはこの謎をときかねて投げ出したのであります、しかも、こゝにめぐまれたる眞實の知慧によつて謎を内から解くことができました「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな」盲ひたるわれらも

#### 第三の聖眼として

の眞實の智慧をめぐまれて、救の大道がはつきりと知らしていたゞけたのであります。だか

ら信心とは眼をつぶつて盲従することではないのである、ほんとうに眼ざめきつて隨順するころであります、こゝに全人格的な肯認がうまれるのであります「眼ざめたる人」といふことは近代語として意味ふかいものであるが、この地上の謎をとくことのできた信心の行人こそ、ほんとうに「眼ざめたる人」として稱讃せらるゝのであります。次に「芬陀利華」といふのは白蓮華のことであり、善導大師は散善義のなかに「芬陀利華といふは、人中の好華と名づけ、また希有華と名づけ、また人中の上々華と名づけ、また人中の妙好華と名づく、この華相傳へて蔡華と名づくるものは是なり」と釋せられました。五種の嘉譽をもうけて釋尊が芬陀利華とおほめなされた氣持をくわしく示されたのであります。宗祖はこれをうけて笠間の念佛者の疑問にこたへられた御消息のうちに「この人を上人とも好人とも妙好人とも最勝人とも希有人ともまふすなり」とのべ、専修寺の一本には上人に「ウエノウエノヒトナリ」、好勝人に「ヨキヒトナリ」、妙好人に「タエナルヒトナリ」、最勝人に「スクレタルヒトナリ」、希有人に「マレニアリカタキヒトナリ」といふ御左訓をつけさせられてある。つまり

念佛をとなふる人々を「白い蓮の花」のやうな人であるとのべられたのは、地上に於て最もたふとい花を以て、人間のうちのほんとうに美しいものであるとのべられたのであります、そしてほんとうに生けるものはほんとうに美しいのであります、念佛の行人は眞實に生ける人であるからであります、眞實の生命がめぐまれてあるからであります。この土で一人、念佛をまふすものが生れたら

### 西方の淨土に一蓮の花

がひらくといふことを「五會讚」にのべられてあるが、念佛の行人はまことに眞實の世界を莊嚴するたうとい人々であります、念佛の行人は淨土を莊嚴する蓮華としていふことはやがて如來の佛心の蓮華が淤泥のやうなわれらの生活に廻施せらるゝに外なりません。大きな蓮華藏世界に統一せられたる聖衆としての資格をめぐまれたのであります。こゝにおいて、極惡底下の凡人も、如來の本願に救はれて、そこに最上殊勝の聖者として値打つけらるゝことを



おもふて、敬虔な生活をひらかねばなりません。若し、これを以てわが身を誇るならばそれは怖しい冒瀆ともなる、われらのうへに尊い価値のあるのは、もとわれらの本質にもとむべきではなくて、如来によつて賦與せられたものであります。如来の世界に召されて更生したからであります。誇るべきことではなくて感謝すべきことである、感謝すると共に自己を内省して懺悔すべきことである。宗祖が眞佛弟子の釋にこれらの榮光を感激したまふや、そこに非痛な愚禿の懺を愧表したまへることは意味ふかいことでもあります。

### 月輪が圓鏡のやうに光る

かくて、われらは依然として、あさましき泥凡夫である、この泥凡夫がそのまゝ尊い行人として莊嚴せらるゝことは不思議な配合であります。しかも月は本來は土のかたまりである、土のかたまりの月がそのまゝ鏡のやうに光るのは日輪の光をうけるからであります。如来の御光を仰いで生きる合掌の生活は、これに等しい風情を帯びて居るやうにおもはれます。

## (第十五) 難信の省察

### 救はるゝものゝ生活

について、上來くわしく讚嘆せられました。そして、救はることは信することにほかならない、信は道元である、信は功德の母胎である、信によつて眞實の生命は體驗せられ、信によつて眞實の生活は展開せらるゝ。かくてすべての人々は信せんとする聖求にひきつけられるのである、しかも、信せんとする聖求がいよいよ切實にして信じ切ることがいよいよ至難ななやみとなつてくる、これ修道にいそむ人々のつねに窮するところである、こゝにおいてわが親鸞聖人は難信の歎を發し、その難信の障碍を反省して「彌陀佛本願念佛、邪見驕慢惡業生、信樂受持甚以難、難中之難無過斯」と仰せられました。いはく彌陀如来のちかはせられた本願念佛の救済は、邪しき見解を有する、驕りたかぶる惡業生であつては信じたもつこ

とが極めて難い、難いなかにも難いことで、これほど困難なことはないといふ意味であります、即ち、難信の障礙は邪見、驕慢を最大とするのであることを示してこれをすて去るやうに誠められたのであります。わが聖人はこの上なく信の卓越性を認知せられた方である、信の卓越性を讃仰することいよくふかくして難信の現實を悲歎せらるゝこと深刻であつたのであります、そして、これはたゞ親鸞聖人の反省のみでなくて、實に教主釋尊の省察でもあつたのであります、即ち、大經にこれをのべられてあります、正依の『無量壽經』には「憍慢と弊と懈怠とは以て此の法を信すること難し」と説き異譯の『如來會』には「懈怠邪見の劣の人は、如來のこの正法を信ぜず」と説かれてあります。つまり、大經の兩譯をすべく、ると邪見、驕慢、弊惡、懈怠、下劣は難信の五障として指摘されてあるのであります。今の正信偈にてはそのうち、邪見と驕慢とをあげられたのであります、この邪見と驕慢の

## 二障は二種深信に反立

するやうにおもはれます。すなはち、邪見は法に對する正信を失ひ、驕慢は機を省みて信知を失ふものであるとも申されませう。邪見とは正見に反立するもので、正法を認知しないものであります、まことに八正道は眞實の世界に赴く道程であるとは大聖釋尊以來の修道の規範であります、してみれば、その八正道を裏返る邪見は到底眞實の大法を仰信することはできない、眞實の大法たる如來の本願に隨順することはできない、かくて邪見は正信を暗殺する魔性であつて、全體を露現する大法も邪見のまへには永劫に見失はれてゆくことでもあります。かくて、法の眞實を信知することのできないものは、また機の眞實を深信することはできない、こゝに驕慢の念慮がうごくのであります、驕れるものは自己をたかめて生きんとするものであります、驕りたかぶる自我のまゝには眞實の世界はひらけて來ない、とりわけ救済の宗教において驕慢こそもつとも大きな躓きであります、われらは邪見と驕慢とからのがれなくては眞實の法と機とを諦観することはできない、この眞實の機と法とを諦観することなくして眞實の信心は開發しないのであります。

### 愚禿の名告は新生活へ

の更生であつたことは、この邪見と驕慢との超越でありました。「愚」の一字はあらゆる凡小の邪見を打破するものであり、「禿」の一字はあらゆる小我の驕慢を粉塵したものであります。かくて愚禿のこゝろは恭敬の信となり謙虚の道となりました。愚禿のこゝろは大法の領受となり、眞實道の隨順となりました。難信の悲歎は愚禿の名告と轉じて易往の大道とうちひらけたのであります。尙ほ味ふべきはこの「極難信の法」といふことは、「法の尊高」を示すものであります。蓋し、常途を超越した絶對救済の大法なるが故に信じがたいのである。そのときは難信といふことそのことが大法の價値を表示することにもなるわけです。

### (第十六) 賢聖にみちびかれて

われらは何處にゆくべきか

この疑問ほど深刻なものはない、われらの眞實に生きる大道は何れに通じてゐるか、この探求ほど切實なものはない、かくのごとき深刻にして切實な疑問を抱いて悩める旅人の行手に「なんぢ一心正念にして直にきたれわれよく汝を護らむ」と喚ぶ聲がきこえた、それと同時に背後から「仁者たゞ決定してこの道をたづねてゆけ必ず死の難なけん」と遣はす聲がきこえた、この招喚と發遣のうちにたゞ一筋の白い道があらはれた、こゝに大道は發見せられたのであつた。更にこれを裏打して云へば大道は發遣と招喚をとほして十方群生界にめぐまれ廻施せられたのである。更に人間の生命史を内觀すればあらゆる聖賢をうみつゝそこに大道が顯現したのである、大道から顯現した幾多の賢聖はすべてみな一切を導いて大道へとか

へつてゆく、かくて賢聖をうむことは大道の必然であり、大道にみちびくことは賢聖の使命であつた、かくて大道の廻施を領得せられた親鸞聖人は賢聖にみちびかれたことを感激されたのであります。茲に「印度西天之論家、中夏日域之高僧、顯大聖興世正意、明如來本誓應機」とは三國の聖賢にみちびかれて、大道に召されたことを感佩せられた讃頌でありました。「印度西天の論家」とは西のなたの印度に出現せられた龍樹と天親の二菩薩であり、「中夏の高僧」とは支那に降臨せられた曇鸞と道綽と善導との三先達であり、「日域の高僧」とは日本に誕生せられた源信と源空の二宗師である、つまり三國の七高祖への景仰であります、この三國の七高祖は大聖釋尊が出現して宣説せられた佛教の根本本質は「彌陀の本誓」こそ人生を眞實に生かす大道であることを示されたのである、七祖の生活はたゞこの大法の生命、大道の本質の顯開を意味するものであつた、親鸞聖人はかくて七祖の行蹟にみちびかれて釋迦の發遣をきき、釋迦の發遣によりて彌陀の招喚にふれ、彌陀の招喚にめざめて願力の白道に乗托せられたのであります。われは開宗者でない、三國の祖師こそまさに一宗の興隆者

であらせらるゝといふのが親鸞聖人のおこゝろもちであつた、親鸞聖人はたゞ

### 謙虚なる佛教への隨順者

であらせられた。この謙虚にして無私な隨順のこゝろをとほしてこそ、大道の眞實が純全に表現されたのであります。親鸞聖人に開宗者としての自意識のなかつたことが、やがて眞實の開宗者としての使命を果遂されたことになりました。無師獨悟の大聖と隨順師教の凡人と、この對立は白道の本質をいよいよ鮮明に示す分化であるとも云へるでせう、いづれにしても最も謙虚に大地にひざまづかれた聖人によりて、最もたかき大法の威權が認證せられ、みちびかれて辿るものとして感激された聖人によりて大道の實質が體感せられたのであります、おもふに聖人ほど師教をすなほにいたゞかれたお方はない、「親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをかふむりて信するほかに別の仔細なきなり」とは聖人の全き信念の表白であります、そはたゞ御師匠法然上人の往生之業念佛爲本の

仰せをいたゞかれたに外ならない、而してその法然上人がたとひ念佛して地獄におちられても、地獄の底までも師匠についてゆかうと信任せられた親鸞聖人である、云ふまでもなく、法然上人の仰せは絶対の道であり、無碍の一道である、こゝに絶対的な全肯定はあらゆる分別をゆるさないのであります、こうして法然一師に對する全き隨順のこゝろが内に開展して三國の七高僧を景仰せられたのであります、凡そ、親鸞聖人に於ける

### 相承に三つの様式がある

ひとつには法然一師に對する相承の様式である、これは「略」の様式であるとも云ふべきであらう、教行信證の後序にはこれをつまびらかに示されてある、「眞宗興隆大祖源空法師」とたゞえ、眞影の見寫、選擇集の附屬をあげて、師資的傳のありさまをのべてあります、次に三國の七祖を相承せられたもので、これは「廣」の様式とも云ふべきである、教行信證の總序に「西番月支の聖典、東夏日域の師釋、遇ひがたくしていま遇ふことを得たり」とのべ、

更に行卷の終りにあるこの正信念佛偈はまさしく三國の七祖の生活と教義とを擔傳せられたことを示されてあります、やがて高僧和讃一帖を撰述せられたのをみても、この三國七祖はいかに親鸞の教系として尊重せられたかゞわかる、最後には法然善導の二祖相承の表白である、これは「中」の様式とも云ふべきである、かの歎異鈔に「彌陀の本願まことにおはしまさば釋尊の説教虚言なるべからず、佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず、善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや、法然のおほせまことならば親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか」とあるによつてもわかります、この善導法然の二祖相承の「中」の様式は、法然一師を相承せる略の様式を擴充したものである、偏依善導とは法然の態度であつた、だから、法然にふれたとき、そこに善導があらはれたのである、而して支那淨土教の三流たる廬山流、善導流、慈愍流のうち善導流の教系をうけられたとき、そこに曇鸞の思想があらはれる、曇鸞はいふまでもなく、龍樹と天親の綜合者であつた、更に善導の先驅として道綽が注意され、法然の先驅として源信が見出さ

れたとき、おのづから七祖が成立したのでありました、二祖の相承がやがて七祖の相承として擴充されたのであります、かゝる内面的な思想と教系とを辿るとき七祖の相承譜系が組織せられたことは決して偶然でないのであります。

### (第十七) 南天の聖者

#### 先聖を慕ふて

三國の七高祖を仰ぎ、こゝに普遍的眞理を顯彰し、正しい相承と傳統とをあきらかにせられた親鸞聖人はまづ印度において龍樹菩薩と天親菩薩とを景仰せられました。この二聖者を景仰せられたことは佛教の二大教系を代表せしめられたものであります。即ち、龍樹は中觀教系の代表であり、天親は瑜伽教系の代表である。この二大教系の代表的人格がひとしく共に淨土教の正しい傳持者であつたことを注意せられたのは、やがて彌陀の本願は一切の教法の歸趣であることを開闡せらるゝ所以も窺ふべきものであります。七祖の系譜はたゞこれを斷片的に、若くは個々の人格についての讃仰にとどまらず、この配列の關係に注意して、全き有機的體系を認めるとき、一層の妙趣を味ふことができる次第であります。そしてまた、

この七祖の系譜はすでにのべたやうに、「よきひと」としての法然上人への歸順のこゝろを擴充されたものとも觀てとれるのであるが、南天の聖者までその教系を溯られたとき

### 大聖釋尊と南天の聖者

との内面的な交渉を光闡することが、一種の苦心の支拂はるところであつたのであります。いふまでもなく、大聖釋尊と龍樹菩薩とのあひだには、かなりの時間がへだつてゐる、空間がへだつてゐる。この間隙と相違とを超越して如實に密切な内的交渉をしるしづけることは實は容易な業ではありません、こゝにおいてか、わが聖人は楞伽經の懸記に注意して釋尊から龍樹菩薩への生命の流れをあざやかにし、以て龍樹菩薩の權威ある使命を顯彰せられたのであります。「釋迦如來楞伽山、爲衆告命南天竺、龍樹大士出於世、悉能摧破有無見、宣說大乘無上法、證歡喜地生安樂」といふ三行六句がそれであり、この一節は誰人も明かに察知することができるやうに、上にのべた楞伽經の懸記によつて讚嘆せられたものであ

ります。いはゆる

### 楞伽經の懸記

といふのは次の如くであります。

我乘内證の智(彌陀の五智)は妄覺の境界にあらず(聲聞や菩薩の覺知で未だ如來の智慧海を測量するあたはざるもの、義)如來滅世の後、誰か持て我の爲に説かん、未來に當に人あるべし、南天國の中に於て大徳の比丘ありて龍樹菩薩と名けん、能く有無の見を破して、人の爲に我大乘無上の法(念佛三昧)を説き、初歡喜地に住して安樂國に往生せんこの經文は龍樹讚仰の一素材として、いろいろ人に注意せられたのであつたが、わが聖人はこれを以て、龍樹菩薩の出現は淨土教の光闡にあり、念佛の傳持にあることを認知せられたのであります、この聖者出世の豫言の有する内的意味はいふまでもなく聖者の眞實の使命であります、そして、龍樹菩薩は大聖釋尊を嗣ぐものとして一般から恭敬せられたところ

であります。まことに像法の始に降誕して正法の生命を傳持せられたのはこの龍樹菩薩でありました。すでに龍樹が釋尊を嗣ぐべき使命を負ふてあらはれたとすれば、大聖世尊の興出の正意は唯彌陀の本願海を説かせらるゝにあつたと洞察される以上、楞伽の懸記に應じて出現せられた龍樹の使命も念佛三昧の開闢であつたことは自然なこととして讃仰せらるゝのであります。これを要するに楞伽經の懸記は大聖釋尊と龍樹菩薩との内の交渉を示す文字であります。かくて、大聖釋尊からわが親鸞聖人へ、生命の流れは秋毫の間隙もなく、すぐれた久遠の人格をとほして響流することが明示された次第であります。凡そ

### 生命の道を行く人

こそ人生に於ける最も誠實な人であり、道は概念のうへに思索されてゐるうちは、未だほんとうの意味がわからない、道が生活として實參せらるゝときはじめてその價值が批判せらるゝのであります。この意味において最もすぐれた批判者は道そのものを行くところの修

道者であります。南天の聖者龍樹はこうした意味における修道と批判との體認者でありました。動もすると龍樹は觀念の化城に自負せる聖者型の人格のやうにかんがへられるけれども、實はそうした意味においてすぐれてゐられたよりも至き人間性をうち出して道を求め道を修められた誠實な凡人型の先達として卓越してゐられることを見落してはならないのであります。これわが親鸞聖人がこの龍樹菩薩を愚禿の第一人者として慕ひ、相承の首座に選ばれた所以であるかとおもひます。然らば

### 道に對する龍樹の鴻判

はいかなるものであつたか、難易二道の批判がこれであり、すなはちこの地上において阿惟越致即ち不退轉に到達するにはそこに二個の道が分判せられる第一は難行道であつて、第二は易行道であるといふのであります。その易行品のなかには、この鴻判をのべて「佛法に無量の門あり、世間の道に難あり、易あり。陸路の歩行はすなはち苦しく、水道の乗船は



すなはち樂しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし、あるひは勤行精進するあり、あるひは信方便の易行をもつて、疾く阿惟越致地(不退轉位)に至るものあり」と示してある。これまでは、向上は唯勤行精進の一道であると規定せられてゐたのであります、しかるに龍樹は傳統的に規定せられた一道を眞實に體認せんとするとき、いつしか道そのものを批判しなくてはならない必然に近よられた、そこで、かゝる道は難行道であると判断した、難行といふことはもとより、行者としての人間性の虚劣を反省するものであるが、その行は道そのものゝ内的必然によるかぎり、道そのものが大地の人間性に適應しないことを批判するものであります、つまり難行道とは天上の空像で大地の規範でないといふことになり、かくて傳習の道を難行道となした龍樹はこゝに新しい道を啓いたのであります、その啓かれたる道がすなはち易行道であります、そのまゝ大地に布設せられて一切群生を生かす道を易行道と云つたのであります、龍樹は單なる道の傳統者でなくて

### 龍樹は大道の啓拓者

でありました、ひとつの道をふたつに分別したのでない、ふるき道の型を打破つてあたらしい道を踏んで救はれた人でありました、かくおもふとき、龍樹の難易二道の鴻判は驚嘆すべき道そのものゝ轉回を意味することを感じるのであります、果せるかなわが聖人はこの鴻業を注意して、この正信偈には「顯示難行陸路苦、信樂易行水道樂」と讃嘆せられてあります云ふまでもなくこの難易二道の鴻判には人間性に對する深刻な幻滅の悲哀が裏づけられてゐる、人間が天に飛ぶことのできないのは人間の誇りでなく人間の恥である、地上の喜悅でなく地上の悲歎である龍樹はまさしく人間は天空にかけりゆく能力のないことを自覺したのであります、「大乘を行するも、佛かくのごとく説けり、發願して佛道を求むるは、三千大千世界を擧ぐるよりも重し、汝、阿惟越致地に至る、この法甚だ難し、久ふしていまし得べし、若し、易行道の疾は阿惟越致地に至るを得るものありといはゞ、これすなはち怯弱下

劣の言にして大人志幹の言にあらざるなり」とのべてゐるが、難行道を去つて易行道に就かんとするころは、かよわい人間の名によつて希願せられたころであります、しかし私はおもふ、龍樹が淺慕な聖者の假面に欺かれなで、かよわい人間の現實をあるがまゝに反省せられた欺かないころ、誠實な認證をたうとく感じなくてはならないのであります。天に飛ぶことのできない人間に向かつて天に飛べと強ゐる道は眞實な道とはならない、そこで天に飛ぶことのできない人間をそのまゝみちびいて生かす道を開闡することが、眞實な修道者であります。かくて

### 一切群生の救はるゝ道

はひらかれた。しからば、この人間の救はるゝ道としての易行道をいかにして迎へべきか、聖者龍樹は易行品に「人能くこの佛の無量力の功德を念すれば、即時に必定に入るこのゆへに我れ常に念す」とのべられた、わが親鸞聖人はこの意をうけてこの正信念佛偈に「憶念彌陀佛本願、自然即時入必定」と讃仰せられました、こゝに易行道へ修入の契機があさやかに

顯示せられてあります、即ち「憶念」の二字まことに味はふべき契機であります、さて憶念とは何ぞや、聖人みづから唯信鈔文意にこれを註解して、「憶念といふは信心まことなるひとは本願をつねにおもひいづるころのたへすつねなるなり」と仰せられてある、すなはち本願を信じ名號を稱ふる信心生活をまうされたのであります、かくて阿彌陀如來の本願を憶念するそこに救ひが見出される、如來の名號を念す、そこに攝取の利益が内感される、もと、如來はわれら凡愚の稱へやすく、たもちやすきために名號を垂れたまふのである、そこでこの名號を信受することが易行道たる所以となるのであります。而してわれら衆生の憶念をたゞわれらの勵みこゝろによりてあらはるゝものでなくて、實に

### 如來の憶念したまふ反映

にほかならないのであります、如來の本願は如來がわれら凡夫に一致をもとめたまふ發現で

あります、われらが如來を求めて結びつくのでなくて、如來がわれらを求めたまふによつて統融とつじゆうされるのであります。如來の名號なごうは如來がわれら凡夫ぼんぷを喚びたまふ勅命しつめいであります、われらが如來を喚んで救済きうさいを希求ききうするのではなくて、如來がわれらを喚んでおさめたすけすくひたまふのであります、それであるからわれらが如來を憶ふこと、如來を念ねんすることは、これは偶然ぐぜんでなくて實じつは如來がわれらを憶念おくねんしたまふ切々の願心がんしんの顯現けんげんであることにきづかねばなりません、喚ぶ聲こゑは喚ばるゝ聲こゑであり、憶ふこゝろは憶はるゝこゝろであります、われらはこの至純しじゆんな憶念おくねんに更生かうせいしなくてはなりません、憶念おくねんそのものがすでに如來のめぐみであるから、憶念おくねんそのものに佛ぶつと遇ふ聖境せいぎやうがめぐまれてくるのであります、わが親鸞しんらん聖人せいじんは至純しじゆんな憶念おくねんの人ひとであらせられました、和讃わさんに「子の母をおもふがごとくにて、衆生佛しゆじやうぶつを憶すれば、現前げんぜん當來たうらいとほからず、如來を拜見はいけんうたがはず」と仰せられてあります、まことにわが聖人が幼兒ごうじの母を憶ふやうな純朴じゆんぱくなこゝろをもつて如來を憶念おくねんしつゝ、そこに如來に遇はれた體驗たいけんがこの一首いっしゆに趣おもむふかくあらはれて居ります。

### 憶念の人は見佛の人

であります、見佛けんぶつの人は信佛しんぶつの人ひとであります、此人このひとは如來に統一とついつせられて如來の生命せいめいを生命せいめいとする人ひとであります、こゝに憶念おくねんの妙趣めうしゆが味あじはゝれます、蓋し憶念おくねんといふは如來と凡夫との相遇あひあふ聖境せいぎやうでありました、この如來に攝護せつごせられたる人は如來と共に生なまる人ひとであります、そこで墮獄だごくの人が現身げんしんのまゝ信じた一念いっねんに如來の攝護せつごにあづかるゆへに、このまゝ再び退轉たいてんしない正定聚しやうぢやうじゆの身分みぶんにさだまるのであります、聖道せいだうの修行者しゆぎやうじやたちが全生涯ぜんしやうがいの知行ちやうぎやうをさゝげても容易やすに體認たいにんされない不退轉ふたいてんの聖位せいゐが信心しんじんの一念いっねんにめぐまれてくることはおどろくべき神秘しんぴであります、これ全く如來の本願力ほんぐんりきのおんはからひによるものであります、これをわが聖人は「自然じねん」であると仰せられました、「自然じねん」の文字もじはわが聖人の愛樂あいらく措そくあたはざる文字もじであつた、「自然じねん」といふは、自みづかはおのづからといふ行者ぎやうじやのはからひにあらず、然しかんといふはしからしむといふことばなり、しからしむといふは行者ぎやうじやのはからひにあらず」(自然法爾章じねんはうにやう)とのべ、

「わがはからはざるを自然とまうすなり、これすなはち他力なり（歎異鈔）とのべてあるごとく、自然とは如来の本願他力を意味するものであります、本願他力にわれらの救ひの自然法爾なることを體驗せられたところに深い直観がひらめいて居ります、すべては自然のおんはからひにはからはれてゆくのであります、自力のはからひをすこしも差しはさむことを要しないのであります、若し自力のはからひによつて悟るのであれば最後まで純全な成就を期することはできない、しかも、他力の廻向によつて救済はあたへらるゝのであるから、信の一念にすべてが満成する、極樂へ往生する因種も成佛の資糧もすべてが信の一念にめぐまらるゝから、

### 信の一念に佛地を嗣ぐ

身分となるのであります。「即時に必定に入る」とは、この充たされたる生命感の表證でありました、「即」とは同時を示すものである、時をへだてず日をへだてず、信じたとき必定即ち必

ず佛地を嗣ぐことを示したのである、また即とは位に即く意味ともなる、佛地を嗣ぐべき聖位に即くことをあらはすのであります。かくて信するひとつにて完全にすくはるゝ本願の名號こそ、われら群生のすべてがこのまゝ救はるゝ白道でありました。

### 念佛は佛教の生命である

と云つて過言でありませぬ。南無三寶は佛教の基調であります。即ち、佛と法と僧とに南無し歸命することが佛教の基調であります。而して佛法僧の三寶は佛を中核の生命となすことは云ふまでもありません。佛教の二千有餘年の教理史はまさにこの念佛のひらけてゆくたどりであるとしてとることもできます。今、試みにこの念佛の展開の史をふりかへつてみて觀鸞聖人の念佛觀即ち淨土眞宗の念佛觀をうかゞふとき、その妙趣が鮮明になるのであります。私の見解によると人間の生活は少くとも三層の展開をとげてゆくものであります。いはゆる三層の展開とは自然生活と理性生活と聖化生活とであります。そして第一層の自然生活とは

自然の價値の實現を試みてゆくものであつて、禍を轉じて福となすことによつて人間をかさんとする生活である。第二層の理性生活とは理性價値の實現をなすものであつて、惡を廢して善を修するところに人生の意義を見出さんとするものである。第三層の聖化生活とは聖といふ至上最高の生命價値の體證によつて本質的に人生を生かさんとするものであつて、

### 宗教の救済とはこの聖化

に外ならないのであります。しかも、人間はひさしくこの眞實の宗教にめざめることがなく、ながいあひだ權假の小路に惑ひ、邪偽の陷阱に落入つてゐました。すなはち自然生活には自然の宗教をつくつて轉禍生福を救ひとするものあり理性生活に於ける道德的宗教乃至合理的宗教は人間の解と行によつて相對的な統一のうちに救ひを見出さんとした。しかし、親鸞聖人はこれを批判した。自然生活に救ひをもとむるものは邪偽の宗教であり、理性價値によつて救ひを見出さんとするものは權假の宗教である。たゞ、聖化生活に於ける本

願の高次的統一こそ眞實の宗教であることを宣明せられました。かくて、生活の重疊の展開につれて宗教に於ける救済の意味もまた進化し分化してきたのであります。従つて、宗教の生命たる念佛もまたこれにつれて純化してきたのであります。純化には複雑な階次もありますが、しばらく、これを三層の生活の展開につれて觀するとき凡そ念佛に三段の純化と轉化があつたことを氣づくのであります。第一層の自然生活に於ける念佛は

### 魔呪的な念佛

でありました。蓋し、自然生活においては自然價値の實現を幸福といひ、これに反するものを禍害といふ。この禍害を去つて幸福になることによつて救ひを見出す次第であるけれども、それはとうてい不可能なことであります。そこで、自然の法則を超越した魔力に跪いてこの魔力の幻影を神とか天とか名づけ、かゝる神々に祈願することによつて現世の幸福をつかまんとしたのであります。かゝる程度のもの類似のものをこゝに魔呪の念佛といふのであり

ます。かゝる魔呪の念佛はくわしく批判するまでもなく溺れたものゝ掘んだ薬であります。しかし、薬を掘んだとてやはり溺れなくてはならないのであります。これは全く念佛の眞實に反した邪偽の呪符であつて親鸞聖人はこれを邪偽の教として勘決されました。かくて、念佛は一段の轉化をとげたのであります。すなはち第二層の理性生活に於ける念佛が現はれました。理性生活はさきへのべたごとく人間の解と行によつて、即ち地上の賢さと善良さによつて理性價値の實現をなさんとするものであります。こゝに念佛は利用せられました。理性生活に於ける念佛は

### 觀念と滅罪との念佛

としてあらはれました。けれども、觀念の念佛はいかにしても佛を相對的な立場において固定せんとするものであつて生命を失ひ、また滅罪の努力は相對的な統一を求むるものであるかぎり絶對の安住は求められないのであります。かゝる、解と行との念佛を超えたところ

に眞の佛を念することができるのであつて、念佛が觀念化の解となり律法化の行となるかぎり眞實の佛を見失つてしまふのであります。これ自力の立場におけるはからひであつて、こゝに佛の生命にふれることは許されてありませぬ。こゝにおいてか親鸞聖人はこれらを權假の宗教として更に一段の純化をとげられたのであります。念佛は救ひをもとむるものゝ姿でなくて、救はんとする佛の招喚に外ならないことを見出されたのであります。念佛は相對的救濟の手段でなくて

### 念佛は絶對救濟の表示

であること、救濟者としての如來の名告であることを開顯せられたのであります。こゝにはじめて聖化生活の高次の統一が體認せられたのであります。念佛はわれら衆生が如來を求めてゆく聲でなくて、その反對に如來がわれら衆生を招喚したまふ御聲である事を信知せられたのであります。念佛は如來のわれを喚びたまふ救濟の御名であるとき、われらはたゞこ

の救ひの御名を聞信するところに救ひが見出されます。われらがこの御名を行することは何等の律法的な条件としての意味があるのではなく、一聲の念佛は如來の慈悲をうけて生きてゆくものゝ姿であります。眞實の生命のしらべそのものであります。かくて、われらは御名をとらふる念佛のころは、われらは久遠劫來われを喚求したまふ如來の聖愛を體認するのであります。かくて、念佛は如來の名告であり如來の招喚であるとき、これを私の立場から云ふときはたゞ感謝の聲であります。喚びたまふ御聲は如來の大悲である。この御聲を聞いてとなふる念佛は大悲の佛恩を領納する報恩の念佛であります。この報恩念佛まで純化して、念佛がすべてのはからひをはなれ、あらゆる概念と律法の殻を破つて眞實の生命にふれたのであります。報恩の念佛をば報酬を求める相對的な功利心の立場に誤解するときには、宗教の妙趣を知らない人々が、言葉にとらはれて戲論を弄んで居るにすぎないのであります。恩に報ゆるは恩を受くることが第一歩であります。

### 報恩は感恩である

恩に感ずることはおのづと恩に報ゆることになるのであります。これを説破されたのがこの正信念佛偈に於ける「唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩」と仰せられたのであります。この二句は龍樹菩薩の念佛を鑽仰せられたものであります。わが聖人は如來に歸依し合掌して念佛したまふ龍樹菩薩のころもちを洞察された上のことです。人格をとほして生命にふれた鑽仰であります。生命をもつて生命を見たるもので文字にとらはれた表現ではありません。そして、かゝる念佛の表現はたゞ龍樹菩薩ひとりのことではなくて、實は三國の七高僧のすべての念佛の註解であります。そして、そのまゝわが親鸞聖人の念佛したまふ素純にして温かいそして敬虔なころもちの表示であります。先哲はこの二句を注意して

### 教行信證の眼睛

であると云つたのはまことに適切であるとおもはれます。「和語の御本典」であると崇重せられる三帖和讃の巻頭に

彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうるひとは、

憶念の心つねにして、佛恩報するおもひあり。

と讃頌せられたことをみても、この報恩の念佛といふことがいかに重要な意味を蔵してゐるか云ふことがうかゞはれます。わが親鸞聖人の御持言が歎異鈔の總結にかゝけてあります。即ち「聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよくく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐あらせられてあります。この

### 「かたじけなさよ」の一語

こそ宗教生活の醇乎たる精骸といふべきであります。この「かたじけない」ありがたい「こ

ころもちはたゞ宗教生活においてのみ内感せられる生活の醍醐味であります。そして、この一語によつて人生に大生命が生まれ、法界の聖愛が領納せられるのであります。愛がないのでない。愛をうけとる素純な純朴のころのかけてゐる荒頑と傲慢とによつて人生はとこしなへに充たされないのであります。わが聖人ほど大きな全き聖愛を領納せられたお方はありません。倫理の世界には「善いことだ」といふ感じはある、しかし「ありがたい」の語は生まれぬ。哲學の世界には「ほんとうだ」といふ認識はある、しかし「ありがたい」といふころもちはない、律法の世界には「正しい」といふほこりがあり、藝術の世界には「美しい」といふよろこびがある、しかしやはり「ありがたい」といふみづ／＼しいなつかしい生命のふくらみは見出されない、「ありがたい」の一語は聖愛に更生した人のみの味到する境地であります。佛を知らざるもの、ほんとうに佛心を領納しないものに、まことの感謝はあり得ないのです。眞實の宗教にあらざれば報謝の稱名はうまれないのであります。「佛智の不思議をうたがひて、自力の稱念このむゆへ、邊地憊慢にとゞまりて、佛恩報するころなし」とは疑惑



の人々の淋しいところも悲嘆されたのであります。いかに數おほく念佛をとなへても佛の大悲に更生しないものは報恩の念のない淋しいのであります。この疑惑讃の一首と、この正信念佛偈の「唯能常稱如來號、應報大悲弘誓恩」の二句とを對比すると、いよく報恩の念佛まで純化された境地をたゞえずに居れないのであります。

## (第十八) 北天の聖者

### 印度の二大聖者

それは、龍樹菩薩と天親菩薩とであります。若し夫れ、佛教の思潮をふたつの流れと観てるときは「有」と「空」との見分けをすることができませう。若しこうした見分けを許し得るなら龍樹は「空」の流れを代表する人格であり、天親は「有」の流れを代表する人格とも云へるでせう。こうした見解を以て龍樹菩薩について天親菩薩を讃仰せられたわが親鸞聖人の傳統の系譜は頗る意味の周到なものがある事に氣づかれるわけであります。即ちたゞ西方願生の先驅者を標しづけたといふだけでなく、印度に於ける大乘佛教の源流についての全き中核であつたことを示すものであります。二大潮流の朝宗するところがこの彌陀の本願海であることを示されたものと欽仰しなくてはならないのであります。さてこの天親菩薩は世に「千部

の論主」と稱せらるゝほど數おほくの選述をなされたのでありました。けれども、このうちで最も純全に宗教的眞理を表證したものは「淨土論」でありました。くわしくは「無量壽經優婆提舍」と稱せられます。この一巻こそ天親論主の宗教的生命の表現であつて、やがて淨土眞宗の尊い礎として敬重せらるゝのであります。淨土眞宗の正依の聖典として無量壽經觀無量壽經阿彌陀經といふ三部妙典をえらぶことは云ふまでもないのであります。この三經と共に崇重せらるゝのはこの淨土論でありました。それ故に、親鸞聖人は教行信證の信證の別序には「ひろく三經の光澤を蒙りて、ことに一心の華文を開く」と仰せられました。わが聖人の生活にこの淨土論がいかに力強くうけとられたかはこの別序の表白をよんでもわかります。そこで、今も、天親菩薩を欽仰なさるや、淨土論選述の鴻業をくわしくたゝえられて、「天親菩薩造論說、歸命無碍光如來、依修多羅顯眞實、光闡橫超大誓願」と仰せられたのであります。

### 淨土論は眞實を顯開

して、如實に讃嘆された聖教でありました。一論の表現するところは宗教生活の究竟態としての淨土の表現でありました。淨土がいかなるものであるかを、これくらゐ分明に力づく象徴されたものではありません。こゝにすべての群生は永劫にほろびない理想を仰信することができたのであります。そしてたゞ理想の淨土を指示されたといふ丈けでなくして、その淨土に往生するの道を開かれたのであります。往生淨土の正因としての一心歸命のこゝろを示し五念の行門をひらいて下され、すべての人々がこの淨土に往生することのできる深い必然を見出されたのであります。この意味において「淨土論」といひ、また「往生論」とよばれることはやがて一論の要旨をうちつけにしめすことになるのであります。しかして、淨土の開顯と往生の大道としての一心五念の表示はたゞその主觀的な觀念や考察ではなくして尊い教權に支持されたものであります。すなはち大聖釋尊の出世本懷として示された三經一

致の無量壽經の女旨を開顯せられたのであります。これ「依修多羅」と仰せられたわけであり  
 ます。修多羅とは梵音でありますが、もと線といふ義であります。さながら線が花を貫通し  
 てきれいな花輪をつくるやうに、佛のときたまふ聖典はすべて宗教的眞理をつらぬいたもの  
 であるからであります。そして修多羅はすべての經典の通名でありますが今は經典のうちで  
 も眞宗の經典としての無量壽經を意味されたものであります。この大無量壽經を開顯したの  
 が淨土論でありました。而して大無量壽經は「本願を宗とし名號を體となす」ものでありま  
 す。そこで、今もまた「眞實(名號)を顯し、横超の大誓願(本願)を光闡したまふ」と仰せられ  
 た次第であります。乃ち知る、大經は大聖釋尊の生命を露現せられた聖典であるとすれば、  
 この聖典の生命を開顯せられたる淨土論主天親菩薩は、まさに

### 大聖釋尊の生命を嗣ぐ

使徒であらせられたことでもあります。かくて釋尊の楞迦の豫言に應じて出現せられた龍樹

菩薩とこの釋尊の本懷經の女旨を開顯せられました天親菩薩とは、共に釋尊の再現として欽  
 仰せらるべき大乘の菩薩であらせられた次第であります。かくの如く仰ぐときは龍樹と天親  
 との二聖者は大聖釋尊の兩脇士として、眞實の法を開顯せられたのであります。この兩脇  
 士の意味を認めて、印度の二聖者を一宗傳統の首座に仰がれたことは、大に意味ふかいこと  
 とまうさねばなりません。

### 大經は眞實の教である

大經が眞實である所以のものは、本願を宗とし、名號を體となすからである。本願と名號す  
 なはち宗教的眞實の究竟態たる絶対救済の妙趣を光闡せられてあるからであります。そこで、  
 その大經の眞實をうけて示された天親菩薩の淨土論はまさしくその本願と名號との讃嘆であ  
 った事は云ふまでもない、「廣由本願力廻向」といふ正信偈の讃句はまさしくこの淨土論の女  
 旨を示されたものに外ならないのであります。親鸞聖人の「他力とは本願力これなり」との

道破は淨土論の主旨によつて基礎づけられてあることも明白であります。宗教は如來と凡夫との統融によつて成立することはいふまでもない。そして、いかにして凡夫が如來に統融されるかは宗教の根本問題でなくてはなりません。これまでの古い宗教では凡夫が如來に向かつて一致を求めるころを基調として居りました。こうした轉回に名づけて廻向といつたのであります。凡夫の知と行、願と力によつて如來への融和を企てたものであります。宗教は人生の方向轉換だといふこともこうした意味においてのべられたのでありませう。ところが、この

### 廻向といふ努力を轉回

したところに聖人の宗教的特徴がありました。この親鸞聖人の宗教的轉回の源流はこの淨土論でありました。即ち、凡夫が如來に向かつて一致をもとむるころに依止せずして如來が凡夫を統融したまふ御ころによつてのみ絶對的な聖化が成就されるのであるといふ新しい

洞見であります。凡夫より如來への宗教を自力廻向とせば、如來より凡夫への宗教は他力廻向であります。この他力廻向とはすなはち願力廻向であります。法藏の本願力とはこれ如來が人生を統括したまふ妙諦に外ならないのであります。これまで如來をもとめて努力してきた人々が如來にもとめられてゐることを信じて救はれたのであります。これ、内面生活における、コペルニクスの轉回でなくてはなりません。かの淨土論には如來を觀じてその根本の聖旨を仰ぎ「佛の本願力を觀するに遇ふて空しく過ぐるものなし、能く速に功德の大寶海を満足せしめたまふ」とのべられてあります。かくて本願力とは如來を生ける姿において信仰せるものであります。しかも人生に向かつてはたらきかける如來の信仰であります。もつと適切にいへば私を救ふために人生に顯現してくださる如來のすがたを仰ぐのであります。聖人のつねの御持言にのたまはく「彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば親鸞一人のためなりけり」とはこれを體認された述懐にほかならないのであります。そしてとりわけて注意すべきことは他力の本願がたゞあくまで外處なる力として私以外に固定してゐるのではな